小田原史談

第 157 号
発行所　小田原史談会
小田原市栄町 2 -13-20

亡友反古帖

島崎藤村

北村透谷子の書捨たる反古にして、積んで其書齋に堆き中より、抜き集めて吾書架の一隅に保存し置きたるものあり、頃日かの反古を棚の上より取りおろし、塵をはたきて彼是と讀み行くに、亡友彷彿として吾眼前にあるが如く、轉た懐舊の情に堪えず。

飄遊を好める面白き男として彼を知れるものもあるべし、俠骨を愛し慈善を好みたる志士として彼を知れるものもあるべし。外面極めて飄逸にして内部極めて沈鬱なる詩人として彼を知れるものもあるべし。自然の研究者として靈活なる［活気ある］評家として彼を知れるものもあるべし。彼は常に吾に告げて曰く余には友少なし、また強て友を求めんともせずと。然れども彼は勉めて交遊を怠らざりければ、彼を知れる知名の君子も少なからざるべし。吾は彼と相知り相慕ひてより極めて深情ある親友として忘る、こと能はざるなり。

歳月江水の如し。げに吾は舊友の再び見るべからざるを思ふごとに、歳月の人の希望と相容れざることを歎ぜずんばあらず。惜しいかな芳蘭夭折［わかじに］して既に幾春秋、幽明境を異にして再び相語ること能はずと雖も、子よ、子よ幽界の事は子が生前に於いて想像せしが如きものありや、否や。いかに冷たき泥土に覆はる、とも、いかに重困しき石碑を戴くとも、いかに一點の日光だも通ぜざる暗孔に押込められる、とも、子は今や何の傷むところ何の羈絆［束縛になるもの］を苦しむところなきか。春くれば櫻の花の子が墓の上に散り、秋は秋草亂れ茂りて墓畔に露の玉の如きものありとも、子は今や何の情を動かすところなきか。今一度人間世界に歸り來つて舊友と相見ることを欲せざるや。嗚呼子よ、子が歩みつ、ある「死」とは夫れ詩人の歌ふ眠の如きものか、眠ならば樂しき眠にてあれかし。

透谷子戯曲に志あり。彼が書捨たる反古を見るに戯曲の稿を成さんとして成らざりしもの頗る多きが如し。彼が遺篋また韻文に富めり、しかも多くは未定稿なり。私に思ふ文藝の事は一朝一夕にして成るものにあらず其琴は一人の琴にあらず、其韻は一世の韻にあらず、夫れ鬼神をあはれと思はせ武き人の心を動かし男女の間をも和ぐる迄には、必ずや數多の詩人が熱情と苦心とを合せて、其の聲、其の力、其の火、其の涙、皆な活けるものとなりて琴心に宿らずんばあらず。吾は亡友の反古をくりひろぐる毎に、今日の詩人の苦心を思ふに堪えざるなり。

聽く「エオリヤン」の琴を窓前に懸くるや、風來つて之に觸れて音を成すといへり。思ふに詩人の生涯もまた斯の如きものあるか。透谷子が始めて詞壇に志せしは十九歳または二十歳頃なるべしと覺ゆ、當時風南子、無性子などの號あり、その頃の反古多くは散逸して首尾全からざる者多しと雖も、草稿の吾許に存せるものにて、江藤浩作、新奇好男子（脚本第四齣まで會話體）南洲の石碑、薄命、袖はぬらさじ（韻文）、桃太郎遠征記、小兒の時、貴人（滑稽流の詩として中等以上の人士が遊惰放縦なることを詰責すべしとあり）、東北振興中原之鹿（小説又脚本めきたり）、林中會議、四條畷（脚本草稿）、世の感、文學の平天地、志士の門出、僧雄正坊、南洲翁（脚本第一齣丈）、これは小説脚本韻文小品等の題目にして論文の草稿には、女子に就て、鳴呼遊廓の大弊害、自由黨自身の病性、日本の婦人に代り俯仰天地に訴ふ、などあり。

少年より大人に飛躍せりとはティンがバイロンを評したる語なり。透谷子の如きも亦然りと言ふべきか。彼が思想上の歴史に於ては一歩は一

島崎藤村（明治26年21歳）

写真は、明治26年1月下旬、明治女学校での教え子佐藤輔子との愛を断ち切ろうと、教壇を去って関西へ漂泊の旅に出る。その途次、神戸の写真館で撮影。初めて眼鏡をかけたという。

北村透谷特集続編

写真（前頁）の裏面には藤村の筆で「透谷庵へ寄す」「已(し)か影や己(おのれ)にあたへて飛ぶこてふ」という句が書かれている。

（小田原市立図書館寄託）

歩よりも高く登れるにあらずして、寧ろ點々飛躍の痕を留めたるが如し。彼が二十二歳より二十三歳の頃までの反古と思はるゝ者には、人間村漫遊記、別乾坤捜索日記、初夢、地獄極樂巡遊日記、我がいほり、お園、薄命兒、篁村翁を評す、渡守、太郎、東屋、無我村、漂流人、夢中の夢（韻文、嗚呼かく弱き人ごゝろ、嗚呼かく強き戀の情などの句あり）、たびごろも、平家行、常盤曲、當世文學の潮樣々、現今文學の批評、義經曲、春の曲、夏の曲、秋の曲、冬の曲、美文學總論、おその（脚本にして幾度か稿を草したるものと見え稿本三四あり、「余は憶せずおそのを出さん若し多くの駁撃者あらば一部の反駁書を出すべし」などあり、荒野の戰ひ、（其脚色は非常に豊饒なる野ありてこゝに曾て蛇を平げたる一の大なる蛄蝓(なめくじ)［えんちゅう］が野の長となり、でん〴〵虫が箱をかついで配權を執行し居り、其臣下には虻(あぶ)、蜂、とんぼ、螢、芋虫、毛虫、蚯蚓(みみず)、蜥蜴(とかげ)、まつ虫、すゞむし、くつはむし、蛙、きり〳〵す、蝉、蜻蜓(せんま)〔せいてつ〕赤とんぼ、螽(いなご)〔しゅう〕ばった、ひぐらし、かじか、虱、蚤、宮守(やもり)、蟻、油虫、蠅、蚊、げじ〴〵、百足、わらじ虫、けら、ふくろぐも、くさひばり、玉虫、黄金虫、などありて、雙蝶を主人公となし、こゝに蛇外より來りて彼等と戰ひ全く荒野となるの趣向）、これら先づ題目の重なるものなるべし。

五緣十夢とは平生彼が戯曲に對する希望にして、其内五緣の方は一緣も筆を染めず、十夢の中、透谷集に出でたる斷篇の別に惡夢と題せしものも見たり、蝶の夢も亦たこの夢中の一夢なるべきか。

蝶の夢脚色

第一齣　雙蝶を點出し花上に舞はしめ

第二齣　二人の少年少女を出して熱き愛情を寫し

第三齣　再び雙蝶を點出して蝶と人と同じが如く同じからざるがごとくとすべし

また左の如き想像と脚色とを記したものあり、

戯曲

蚓蚯を見て感あり

蚓蚯、鼠、猫、狐、等いろいろのものを人間位の大きさにして、形を造りて各その思ふところを言はしむべし而して之を人に比較すべし。

智情意の動物をして各其性質を顯はさしめば妙

吾が知りてより透谷子四度居を轉ぜり。高輪の舊寺に寓せし時、庭前草花あり、花園に隣りて畑あり室のうしろは老杉鬱蒼古墳壘々としてかの「鬼心非鬼心」を草せしは爰(ここ)なり。高輪を去て芝公園紅葉館の裏手なる小堂に移りしや、絃歌手に取るが如く聞え、古木堂を擁し、蚊多く、室暗く、猫を捨てられて心を傷めし事も度々なりといふ話もあり、老鼠堂の庵に近くして永機宗匠をやりこめたる話も聞けり。こゝも住みうくてや麻布に轉じ、山羊を買ひて面白からず、霞町に轉じてまた面白からず、後ち相州國府津の舊寺の一堂を借受けてこゝに一家を樂しみ、波の音に蝶の夢を破られて再び都に上り。芝公園の舊堂に歸りて病んで再び起たざりき。嗚呼想ひ來れば吾が眼前に浮び出でゝ、吾をしてこの文を草せしむと雖も、文に情なく詞に力なく不肖徒らに彼をして幽界のかなたに一笑を催さしむるに過ぎざるのみ。

盛会だった北村透谷百年祭

北村透谷百年祭が、市民有志により、命日前日の五月十五日(日)十一時より、透谷の墓所がある小田原市城山一丁目高長寺に於いて開かれ、折からの雨に拘らず盛大に営まれた。

各自墓参り後、本堂での追善供養には、透谷の孫に当たる堀越慎一氏が参列された。最初に発起人代表井上和男氏の挨拶。続いて読経のうちに焼香、そして追善回向が行われた。

引き続いて、「透谷を偲ぶ会」は、席を同寺客殿に移して開かれた。挨拶に立った発起人副代表金原左門教授は、今後毎年透谷追悼の会を開きたいと述べられた。次に鈴木貫介副代表の献杯後、主だったひとが立って代わる代わるに、話題を提供し、透谷の業蹟をたたえた。その中には、小沢良明小田原市長や、各地から駆け付けた、透谷研究家の平岡敏夫群馬大学長、色川大吉教授を始めとする、多彩な顔触れがあった。参会者百二十数名。

序文

飛星水に白きが如く落月汀渚［なぎさ］に動くが如き君の生涯は、われにいかなる妙機をや教えし。吾が君と相知りしは實に壬辰［明治二十五年］秋の頃よりなりし、夜もすがら慨世［世をうれいなげく］悲歌の物語に暁色の半窓を犯すを知らず、詩興大に到りて情致の機微に筆を執らんことを約す、既にして曉鐘幽かに庭樹に響くや、共に坐に堪えずして潜々たるものあり、吟哦［歌う］交々喉を塞ぎて沈痛の氣は室を繞れり、柳は黒く月は咽びたる、中宵［夜半］綺疏［あや模様を金属にほり込むように文を綴る］を歩むのは此日此夜の感は、今も尚ほ忘るゝ能はず。袂を引きて君は言へり、吾が死後吾が傳記を記さん者は誰ぞと。吾は言ふ、そは他に其人あるべきか然れども若し君の熱涙を一冊子に集むるの人はと問はゞ夫れ吾れなりと言はん。斯くして越ゆること僅かに二ケ年、其春吾が北遊の旅より歸るや、先づ武陵の便りを聴くものは君が他界に消え去りし音づれなりし、人事無常の迅速に愕くものあり、茫然として直ちに君が墓前に走れば、幽鳥［奥深くひそむ鳥］聲空しく閑境に落ちて復た君が飄落［ただよいさすらう］たる面影を見る能はず、白雲央々［鮮明なさま］たり、想ふて雲路［雲のたなびいた道］阻て、長し、せめてもの心斗りに其年君が知友を相會し、俎橋畔亭に君が追悼の志を爲すや、知名の文士爭ひ集まりて波浪に脱れし巨魚を惜まぬ者あらず、其秋君が文集一冊を成して透谷集と命じ、杜子［杜甫か］が所謂［言うところの］飄然［ふらりとさまよう］として群ならざる君が詩想を江湖［世間］に問ひぬ。爾來［以来］年を追ふて漸く君を知る者多く、折れしまゝ咲て見せたる君が心花を追慕して、吾れに其全集を成さんを迫る者多し。偶々君が家人の、一少女を伴ひて吾を訪ふあり、其何者なりやを問ふに、これ透谷子が半身を投げ與えしといふ其人の、心を籠めし、君が遺愛の片身なりし、沈痛の氣孤憤の相は君が眉宇を再び爰に見るの思ひあらしめぬ。此夜枕頭荐りに君の遊魂と談りて、之れより復た他事を排して君の遺稿を完からしめんと發意するに、禿木子亦此志ありて助成することを尠からず。今年漫りに君が遺篋［遺品の手箱］を探りて其斷片隻句を拾集補綴し、以て君が半生の傳記たるもの、又は未定稿の腹案をも知るべきもの、總て其日記に併せて終に日誌摘録を巻尾に編むの罪を犯せり。君が戯言遂に實と成て吾が誓言を全ふせしめ爰に全集完成を告げしむるの悦びを悲む。

明治壬寅の初秋　知友　星野天知　識

亡友を吊ふ

春の夜の雨しめやかなるに、ひとりことくにの詩人が恨みを想ひて、薄命の記をつくりしその筆未だかわかず、われは我友を吊ふの不幸に逢ふ。露をくみ風に吟じ、蝉の羽のかろく江湖にさすらひしもの、一朝斷續の聲を遺して、孤清の姿を葉がくれのけぶりにかくす、悲哉。

蝉羽子北村透谷君、君が清高の音なほわが耳にあり。君が獨苦の姿なほ我眼にあり。あはれ死といふものゝあやしき。われは君が逝きしをまこと、思へず。君なきをまこと、も思へず。悲壯君が如きもの、死して何ぞ寂たる、されど勁瘠の氣（強くすこやかな気）はなほ君か眉宇に溢る。沈痛の氣はなほ君が眉宇に溢る。死といふもの、あやしき、われは君なきをまこと、も思へず。

去年夏七月、ともに携へて青山流水の間に遊ぶ。時に無聲は袋を負ひ、破笻（笻＝竹の杖）にすがりて石山のほとりに漂ふ。東西日を期して富嶽のもとに會す。須磨の浦風に吹かれ。芳野と戰へり。孤劍陣頭に立ちて慨然（志をふるいたたせる）として叱咤したる其風姿今なほ見るが如し。悲むべし、幾千百の年を經たりし敵は君の獨力に動かざりき。君終に仆れぬ。見よ、此の集、君が揮ひし鐵槌こゝにあり。君が翳し、太刀彼處にあり。鎧袖ちぎれ兜落ちたり。ア、想界（観念の世界）荒寥（あれはててものさびしい）草茫々として當年は夢の如し。君世を去る前數日、君が僑居（かりずまい）を芝の公園に訪ふ。君談笑常の如し。去るに當り家人眉を顰めて曰く、君等と談する時、しかし樂しきが如し、何の故ぞ孤獨の時、かの狂亂に似たると、悲慘の事跡終に吾脳裏を去らず。透谷全集新に成れども君また返らず。痛恨殊に深し。

明治三十五年九月誌　戸川秋骨

序文

硝煙彈雨の間に殘壘を死守する勇士の奮闘は悲壯なり。一國の安危を雙肩に擔ふ志士の盡瘁（心をつくし力をつくす）も悲壯なり。然れども想界の戰士が苦戰は更に悲壯なり。畏友、故透谷北村君、君は詩人なりき。思想家なりき。而して又戰士なりき。君先づ世と戰ひ人と戰へり、次で魔と戰ひ靈と戰へり、終に自己

の花の下に迷ひし無聲（島崎藤村）がもの語りに、我等は共に武陵（武蔵国江戸の異称）塵中の哀れを告げて、痛飲夜を徹すること二日、悲喜こもごも大笑のうちに投ず。蝉羽子酔ふて笈中の一曲を讀む。これそのつくるところ惡夢の一篇なり。起て袖を振てオフェリアの一曲を歌ふ。凄婉の聲なほわが耳にあり、俯して狂公子が獨語を誦す。沈鬱の音なほ我胸を去らず。

かくて蒼梧洞［戸川秋骨］も來り會し、沼津より車をやとひ馬を驅て函嶺に向ふ。道崎嶇［道の凹凸したさま］として石を轉ずるが如く、蝉羽子單衣破笠、起て自ら鞭を取る。青山流水は馳するが如く、四個［四人］快哉を叫びて三島に到り、酒を酌むで更に山に登る。ゆくこと幾囘、［囘＝谷の深さをさす］山茫々として草なく水なし。蝉羽子佇立［たたずむ］久しく西方を望む。黙して語なし。既にして曰く、我も亦瞬時の詩人たるを得たりと、笑て更に道を追ふ。黄昏湖畔の破宿に投ず。

葦の湖は沈々たり。月は破雲にかくれて凄光僅に崖頭の孤松にかゝる、湖上朦朧として煙の如く、滿月の静寂身は幻境にある者の如し。四個相顧みて語なし。稍久ふして蝉羽子僅に口を開きて曰く。人生何ぞ悲涙多き、わが半生何ぞ惨々たると、かくて暴雨の前の花のいろ、蛛網のかすかなるよりも果敢なき人の心を悲しみては、往時を語り、今昔を想ひ、嗚呼誰か我死後に我一生の悲涙を傳へむと、四個相顧みて語なし。凄々たるその貌、沈々たるその語、なほわが胸奥に刻むものあり。

翌蝉羽子袂を分ちてひとり奥羽の山河に向ふ。秋かへりて湘南の一江村に退き、一家とともに静に其心を養ふ。時に京にいでて相往來す。一日透谷橋畔の家に君を見る。君曰く、大濤怒り激浪躍るにあらずや。人間何ぞ獨り静なるを得むと、また語をつぎて、誰か我一生の悲しき事を傳ふるものぞといふ。この時蘇峰氏の嘱によりて、エマアソンが傳を編まむとす。蝶の歌をつくる前後三篇、悲凄々人の心を襲ふ。これ終焉の作となる、悲しからずや。

無聲が長途の旅よりかへるや、かれは北邙の一村寺にあり。一日蒼梧洞を訪ふ、蝉羽子あり。三個ともにいで、我庵に向ふ。天王寺の塔夕陽に映つるを見、愛護精舎の前をよぎり、いで、一破亭に酌む。蝉羽子の曰く、何等の清遊、われは世の破れざるが故に我心を破るを恨むと。既にして曰く、悟るといふ事が氣にくはぬ、迷ふならば飽くまで迷ふにしかない、尊氏のやうなもの、光秀のやうなもの、なぜに一生の終りにこの悟りといふものに欺された、清盛のやうに。將門のやうに、なぜに迷ひ盡くさぬのである。嗚呼この語われに終焉の辭となる、惨ならずや。

かくて夕暮れに手を携へて小西湖畔に到る、柳葉枯れ落ちて影を止めず、藕荷凋殘［しおれ枯れ残った蓮の葉］凄風寒し。ともに語をひそめて世途［世に処する道］の崢嶸［そうえい］とも読む。高くけわしいさま］を語る。車に駕して江戸橋畔に袂を分たむとす。蝉羽子燈影に我を顧みて、佇立久ふす。われ又これより蝉羽子を見ず。

嗚呼人間の孤獨なる、その悲涙と熱血を擔ふて、自ら凄惨の淵に逝かざるべからざるか。蝉羽子、君に妻あり、兒あり、君に友あり。なほ獨り自らその悲涙を負ふて、逝くべき處に逝かざるべからざるか。なほ獨り自らその熱血を沸かして、落つべき處に落ちざるべからざるか、二十七年五月十五日夜深くして臥床人なし。月光朦朧破窓を洩る。蝉羽子獨り庵をいで、何れにかゆきし。緑樹蔭暗く早や夏虫の聲かすかに、君が心をさそふ者ありしか、君が燈火の如き眸をかきたて、遥かに嫦娥［月の異名］の光を追ひつゝ、幽林の間かしこにさすらひ、こゝにさまよひしならめ。かくて月は西へ〳〵と落ちて寂として其光の消えし一刹那、暁の風寒く瘠骨を吹きて、露冷に君の病の袂に落ちし時、君が半生の悲涙と熱血は如何なる狂ひをわかしけむ、眠るが如くにしてこの悲惨の一生は終りぬ。嗚呼到瘠の氣はなほ君が眉宇に溢る、沈痛の氣はなほ君が眉宇に溢る、われは君なきを眞とも思へず。こえて十七日、族子知友相會し香煙の寞々たるなく、讀經の寂々たるなく、魂は白金・瑞松禪寺の清風に葬られぬ。

氣君の如き、かつて劒を按［なでる］して起ちしといへり。情君の如きかつて飛蛾をころさずといへり。想を功名に寄せて得ず。筆を騒壇にたて、果さず。いたづらに薄倖の名を江湖にとどむ。コンコオドの聖者が傳の如き、僅に蘇峰氏が平生の眷顧［情をかける］に報ひしのみ、去年病中に稿を脱す。梓［版木のこと、転じて書物を出版する］に上りて僅に半月、未た巻を手にするに暇あらず、早くこの不幸に逢ふ。かつて鎌倉に遊び、凡ての秋の悲を想ひて、一新哀詩をものせむとす果さず、又身をさゝげて劇部に投ぜむとするの志あり。

五縁十夢十餘編の戯曲を成さむとす。惡夢は其一なり。病中の稿斷編の今庵中に遺るありといふ。

〔編集付記〕以上は、『透谷全集』（星野天知編・明治三十五年・全一巻・博文館刊）の巻頭に載る、文芸雑誌『文学界』同人の、星野天知、戸川秋骨、平田禿木、島崎藤村の四編を再録。編集上末尾の藤村のものを冒頭に掲げた。

富嶽の詩神を思ふ

北村透谷

空を望んで駿驅する日陽、虚に循つて警立する候節、天地の運流、いつを以て極みとはするならん。

朝に平氏あり、夕に源氏あり、飄忽として來る、一潮山を噬んで一世紀沒し、一潮退き盡きて他世紀來る、歷史の載するところ一潮毎に葉數を減じ、古苔蒸し盡して英雄の遺魂日に月に寒し。

ああ人生の短期なる、昨日の紅顔今日の白頭。忙々促々［せわしいさま］として眼前の事に營々たるもの、悠々綽々として千載の事を慮るもの、同じく之れ大暮の同寢。霜は香菊を厭はず、風は幽蘭［ゆかしい気高い蘭］を容さず。忽ち逝き忽ち消え、邈冥として踪ぬべからざるを致す。

墳墓何の權かある。宇内［天下］を睥睨［横目でにらむ］し、日月を叱咤せし、古來の英雄何すれぞ墳墓の前に弱兎の如くなる。誰か不朽といふ字を字書の中に置きて、而して世の俗眼者流［俗目＝平凡な見方］をして縱に流用せしめたる。嗚呼墳墓、汝の冷々たる舌、汝の常に餓ゑたる口、何者をか噬まざらん、何物をか呑まざらん、而して墳墓よ、汝も亦遂に空々漠々たり、水流滔々として洋海に趣けど、洋海は終に溢れて大地を包まず、冉々［進むさま］として行暮する人世、遂に新なるを知らず、又た故なるを知らず。

花には花に弄せられざるもの誰ぞ、月には月に翫ばれざるもの誰ぞ、風狂［はげしく吹く風］も亦た一種の變調子、風狂も亦た一種の變調子なりとせば、人間いかにして變調子ならざる事を得む。暗冥なる「死」の淵に、相及び相襲ぎて沈淪するもの、果して之れ人間の運命なるか。舌能く幾年の久しきに辯ぜん。手能く幾年の長きに支へん。辯ずるところ何物ぞ。支ふるところ何物ぞ。わが筆も亦た何物ぞ。言ふ勿れ、蓊鬱たる森林、幾百年に亘りて巨鷲を宿らすと。言ふ勿れ、豐公［豐臣秀吉］の武威、幾百世を蓋ふと。嗟何物か終に盡きざらむ。何物か終に滅せざらむ。寤ざらむもの誰ぞ、悟らざるもの誰ぞ。損喪せざるもの竟に何處にか求めむ。

寤［めざめ］果して寤か、寐［ね］果して寐か、我是を疑ふ。深山夜に入りて籟［ひびき］あり、人間晝に於て聲なき事多し。寤むる時人眞に寤めず、寐る時往々にして至樂の境にあり。身躰四肢必らずしも人間の運作を示すにあらず、別に人間大に施爲するところあり。ひそかに思ふ、終に寤ざるもの眞の寤か。終に寐せざるもの眞の寐か。此境に達するは人間の容易く企つる能はざるところなり。

愛すべきものは夫れ故郷なるか、故郷には名状すべからざるチャームの存するあり。風流雅客を嘲るもの、邦家［国家］を知らざるの故を以て彼等を貶［けなす］せんとする事多し。故郷は之れ邦家なり、多情多思の人の尤も邦家を愛するは何人か之を疑はむ。孤劒提げ來りて以太利の義軍に投じ、一命を惡疫に委したるバイロン、我れ之を愛す。「請ふ見よ、羅馬死して羅馬の

女學雜誌　女學界
草・壹・號
目次
琵琶法師（悲曲）　古藤庵。
吉田兼好　　　

遺骨を幾千万載に傳へ、死して猶ほ死せざる詩祖ホーマーを。」邦家の事曷んぞ長舌辯士のみ能く知るところならんや、別に滿腔の悲慨を涵へて、生死悟明の淵に一生を憂ふるものなからずとせんや。

俗物の尤も喜ぶところは憂國家の稱號なり。而して自稱憂國家の作するところ多くは自儘なり。彼等は僻見多し、彼等は頑曲多し。彼等は復讐心を以て事を成す。彼等は盲目の執着を以て業を急ぐ。彼等は夢幻中の虚想を以て唯一の理想となす。彼等の慷慨、彼等の憂國、多くは彼等の自ら期せざる渦流に巻き去られて終ることあるものぞ。

朽ちざるものいづくにある、死せざるものいづくにある。われ答を俟ちて躊躇せり、而して答遂に來らず。朽ちざるに近きものいづくにかある。死せざるに近きものいづくにかある。われこの答へを聞かんが爲に過去の半生を逍遥黙思に費やせり。而して遂にその一部を聞けりと思ふは、非か、非ならざるか。

天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を、天の原振りさけ見れば渡る日の、影も隠ろひ、照る月の、光も見えず、白雲もい行憚り時じくぞ雪は降りける、語り繼ぎ云ひ繼ぎ行かん富士の高嶺は。（赤人）

白雲、黒雲、積雲、濆雪、閃電、猛雷、是等のものを用役し、是等のものを使僕し、是等のものを制御して而して恒久不變に威靈を保つもの、富嶽よ、夫れ汝か。渡る日の影も隠ろひ、照る月の光も見えず、晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す、富嶽よ汝こそ不朽不死に邇きものか。汝が山上の浮雲よりも早く消え、汝が山腹の電影よりも速に滅する浮世の英雄、何の戯れぞ。いさましや汝の山麓を西に馳する風、こころよや汝の山嶺を東に飛ぶ風。流轉の力汝に迫らず、無常の權汝を襲はず。「自由」汝と共にあり、國家汝と與に樹てり、何をか畏れとせむ。

遠く望めば美人の如し。近く眺れば威嚴ある男子なり。アルプス山の大歐文學に於ける、わが富嶽の大和民族の文學に於ける、淵源するところ、關聯するところ、豈寡しとせんや。遠く望んで美人の如く、近く眺めて男子の如きは、そも我文學史の證しするところの姿にあらずや。アルプスの崇嚴、或は之を缺かん、然れども富嶽の優美、何ぞ大に讓るところあらん。われはこの觀念を以て我文學を愛す。富嶽を以て女性の山とせば、我文學も恐らく女性文學なるべし。雪の衣を被ぎ［かぶり］、白雲の頭巾を冠りたる恒久の佳人、われはその玉容をたのしむ。

盡きず朽ちざる詩神、風に乘り雲に御して東西を飄遊し玉へり。富嶽駿河の國に崛起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天崖［天、そら］よりその山巓［山頂］に急げり、而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐まり棲みて、遂に復た去らず。是より風流の道大に開け、人麿赤人より降って、西行芭蕉の徒、この詩神と逍遥するが爲に、富嶽の周邊を往返して、形なく像なき記念碑を空中に構設しはじめたり。詩神去らず、この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり。

（『文学界』第壹号所載明治廿六年一月三十一日発行）

一年は夢の間にすぎぬ今日は　北村透谷ぬしの世をさり給ひし日なりと　思いいでゝよめる

五月十五日　戸川残花

こゝは何處ぞ瑞聖寺　不立文字の法なれど
我はおくれし春の雁　つらぬる文字をゆるせかし
（瑞聖寺は武州荏原郡白金村にあり、今は市區に入れり）
袖ふきかへす風すらも　在し昔を思ひいで
心ありてか散る花を、悲しきあとへよするなり
（文學界三號に透谷子の五羅説の贊に「花埋めにして」云々の句あり）
たはるゝ蝶も力なく　君がおくつき近くより
うつしみの世は春なりと　かたるにあらんあなあはれ
（透谷子に「蝶のゆくへ」の新躰歌あり、透谷集二百五十二頁）

今はなかなか忍ぶべき　涙もいでずたゝずめば、
老鶯の葉陰より　法　法華經もたがためぞ
朧月夜に來ても見ん　君が唱ひし髑髏舞
されば兄君世は今も　錦をかざりし髑髏のみ
（遺集二百五十五頁に髑髏舞の新躰歌あり）
髑髏と舞ふも面白や　髑髏となるも面白や
月にあくがれ花に酔ひ　美妙の中に入るならば
こゝは何處ぞ瑞聖寺　柳は暗く花紅し
たゞぬかづきて物いはず　手向の水のぬるむのみ

『文学界』　第二十九号所載
明治二十八年五月三十日発行

北村透谷　係累覚抄

平成6（1949）年5月14日編成　小野意雄

〔参考資料〕「御家中先祖並親類」「小野家由緒書」
「小田原医家伝」（中野敬次郎著）
「北村透谷と先祖」（内田勝彦著）
「透谷全集」（勝本清一郎編）

縁組関係 ＝

小田原藩医家係累覚抄

中村見外 250石
雲説 — 見外、楠蔵
養娘　後妻（町医小林玄利娘 吉野伝右衛門中養）
弟 玄常 ＝ 養娘
意仙 ＝ 意珊 ＝ 玄常（方士）
なへ ＝（江戸町医船戸意晋弟 酒井左衛門尉様家来トナル）
段之丞 … 豹二郎 — 太十郎恒剛家 126石
兄 小野東庵 250石 … 朝右衛門 — 司家 200石
富田玄昌 — 玄昌 — 玄仲 — 玄昌

市川玄順、内海彦策、間島玄桃（国府津村在医）、小笹玄庭、堀寿庵、見外、東温（芳文）、杉本隆玄

共斎、隆甫 末期養子、養三 337.5石、東甫、玄知 150石、杏春 100石、娘 ＝ 弟 揆斎 250石、兄 仲純、娘聟 見養、娘（松田惣領在医）、①東温（意珊）147石、②隆元（彦方）150石、元道 300石、源兵衛、すみ ＝（前川村百姓）

石井平左衛門 280石、戸田二連木 150石、玄智 42石、大久保太惣左衛門 1000石、栄達、大久保弥右衛門 1000石、大河内隻人（宇右衛門）200石 末期養子、一 萬亀蔵（熊太郎 意珊）文政5 4 4生 M21 9 30没 安政5 8 28、二 東温（意珊）、六 良哲（銀治）、③トウ ＝（吉浜村在医 富田文斎 両養子）、鑑之助（了吉）、ちか（山元鎚之丞妻）

石井珊吾 — 大八郎
きん ＝ 小野豹二郎 — 太十郎恒剛
かね（小島良兵衛妻）
高室中左衛門 100石
真田六郎 — 隻雄、漁四郎、沢三郎
①雅楽介 — 鋌之介、宇津秀橘
②山本修理 380石
③大久保梅干介 150石
④静衛（直言）＝ 安政6 12 15結婚
①サク（弘化2 2 25生）
②ハル（弘化4 4 17生）
①トキ ＝ 吉田良信
②コマ（後藤某）
⑤リウ ＝ 石黒某
熊太郎
はな ＝ 豊原祐清 30.16石

北村家

玄快 300石　寛政2 婿養子　寛政8 9 20没
玄塊（前川村在医）— 宗左衛門 — 久太郎
兄 丸山良伯 …（絶家再興）… ②丸山垣穂 M6 5 30生 S3 8 19没 — ⑤かつ
弟 玄快（玄器 玄喜）文政10 3人扶持　天保5 10人扶持　天保12－17没
兄 小林平十郎 30石、浦井以春 5石2人、平田権八 60石、天保4 10 21養子 37石 天保9 10 21没
弟 見順　天保10 4 11 死後ノ養子
玄碩　天保2 12 8没
すみ

北村家親類縁者覚抄

伊達本益（駿東郡神谷村在医）、村山玄全（台宿町在医）、小林行蔵（新宿町在医）

弟 玄快（玄斎）32石　文化12生 M17 5 12没　天保10 6 2
妹聟（町人 萬町）— 惣吉
源次郎 — 熊吉
ちか　結婚 K3 3 15入籍
助次郎
②ミチ
従弟 万之助（作蔵）
高浜熊之助 6石2人
従弟 篠田織人 32石
篠田半之助
実方従弟 向井弾右衛門 136石
兄 玄覚（曽我伊豫守様家来）
兄 玄周（竹松村在医 三）
咸安、銀次郎、作兵衛、茂助

③ユキ　嘉永2 10 18生 T4 8 20没
④快蔵（薫圃）42.5石　天保13 7 25生 M37 10 25没　M4 3 27相続 M21 10 2隠居
M1 2 5結婚
石坂昌孝 — 家満 ＝
川島宗格 50石
さく（後ニ嫁ス）— 金子武一郎 30石 — 喜久弥
竹内藤左衛門弟
弟 吉田弥三右衛門　実母方従弟小島久馬
小島久馬 90石
さと（西村玄琅養娘）

門太郎（透谷）M1 11 16生 M27 5 16没　M21 10 2相続
ミナ K1 8 29生　M25 3 12結婚
公歴、登志
英子　M26 6 15相続　M25 6 1生 ＝ 堀越万三郎 — 美恵子、千鶴子、真一、愛子
キン（後妻）— ③八重 ＝ 音次郎、ミツ ＝ 坂本重関 67石
二 音次郎 ＝ 近藤セン（先妻）— カネ
正治 — 秀吉
石塚達三郎、石塚千之助

中垣斎宮 300石
向井弾右衛門 136石 従弟
320石
妹聟 黒柳孫左衛門、①謙蔵、②西村隆運
西村玄琅 160石 — 姉 ＝ 聟養子
小島良兵衛 90石 ＝ 戸田かね
妹聟（吉之助）吉太郎、妹聟 岡儀兵衛 57石、小島久馬、曽根とよ、近藤しま（左郭妻）120石

上中級藩士係累覚抄

大河内隻人親類縁者覚

弟		鉄治
伯父	150石	久保田養仙
同人子		〃六右衛門
〃		〃金八郎
	100石	築瀬左織
伯父		成田遊川
従弟		〃久三郎
〃	300石	黒柳保蔵
実従弟	126石	広仲太次馬
実伯母聟		〃応円
〃	100石	田村弥函兵衛
	600石	吉野図書
従弟	100石	板倉四郎兵衛
〃	100石	磯田平馬
〃	150石	飯野左織
〃	30石	中山久登
〃	100石	大沢弥作

大河内静衛親類縁者覚

叔父		奥田鉄治
同人嫡子		〃茂太郎
従弟	70石	大木寅吉郎
		〃錠次郎
母方従弟		築瀬辰之助
実方従弟	600石	渡辺三左衛門
同人弟		胡桃平補三郎
〃		〃鶴吉
実方従弟	126石	小野豹二郎
実母方叔父		宇津龍鱗
〃従弟		大久保弥六郎
〃〃		吉野大炊介
実方甥	800石	卆石剣之介
		〃熊吉

故北村透谷

坂本易徳　談

（透谷会絵葉書）

（承前）

それから私は郷里で小學（啓蒙学校（小田原市立三の丸小学校の前身））を卒業する、中學校（五郡共立小田原中学校）に入學する、半途で東上致しましたが、其の頃我々より前に上京して居る郷里の學生輩が、函東會といふ團體を組織して居つて、毎月一回日本橋邊の貸席で會合する例になつて居ましたが、此の會合には北村氏は見えた事はなかつた。これは何ういふ譯であつたか知りませんが、我々が小學時代に於いて忠告社といふ團體がありましたけれども、此れにも北村氏は入社しなかつたのです。後に新體詩などを作つた人でしたから、餘り大勢集つて騒ぐことは嫌ひであつたのかも知れません。今日より見れば氏の厭世は早くも小兒時代に現はれて居つたとも云ふことが出來ませう。と申して然う私は斷言するのではありません。斯ういう風で同じ東京に居つても互いに顔を合はすといふことはなかつたのです。人の噂によれば早稲田の専門學校に入學せられたが、それを半途で廢めて、八王子邊に政治運動に行つて居るといふ様な話を聞いて居りました。所が私が三田（慶応義塾正科（予科））を卒業して再び同塾の大學部に入學した頃でした。銀座を散歩して居りますと、或本屋の店の側に幅三寸位縦三尺位のペンキ塗の板に『北村門太郎著楚囚之詩』と書いてあつたのを見たのです。『楚囚之詩』といふものは何が書いてあるものやら其内容は知らず、其の著者の北村門太郎といふ人は誰であるやら、知つて居る北村氏のことか又同名異人かと疑ひながら記臆に留まつて居たのです。それから二三箇月の後に三田の通りで偶然に北村氏に邂逅（思いがけなく出会う事）しました。小學時代で別れ切りになつて居つて、互に人の噂で其消息を知つて居る位で、精しいことは互に其の現況を知らなかつた間でしたから、ヤア門ちやんぢやないか、キンペイちやん（小生の幼稱）ぢやないかと互に言葉を交し合つて、君は何うして居る。普連土女學校の教員を爲て居る、今其の歸り路だ。さうか僕は此處の文學科に入學して居る、此の四國町に下宿して居る、急がなければ寄らないかといふ様な工合で、北村氏は私の下宿に立寄られたのです。それから互に別れて以來の歴史を語り合ひました。そこで私は銀座で見た看板の事を話しますと、矢張同氏の著述なので、又『蓬萊曲』といふ一篇を公にしたから、今度來る時に持つて來るから批評して呉れろなどと云はれ、頻に氏は文學上の談話を試みられた。一體私の文學科に入學したのは一のリベラルエジュケーションを受くる積もりで、筆によつて生活しやうの、文學者とならうなどといふ覺悟は無かつたのです。のみならず、本塾では憲法論だとか代議政體とかいふ書物のみを講讀して、多少政治經濟の頭はあつたにしろ、大學部に入つてから未だ一年とは經過しないので、純文學の方ではロングフエローの詩集を教はりかけといふ有様ですし、一方に雑誌や何かで多少文學上のことは知らない譯でもなかつたのですが、先づ文學といふ方面は全然知らないと云つた方の頭でしたから、北村氏の談論は餘り私の頭に入らなかつたのです。併し北村氏は私が文學科に居るといふので、同好の士を以て目し頻りに談論を試みられた。殊にカーライルを餘計に論ぜられた様に記臆して居ります。それから二三日たつて約束通り『蓬萊曲』を持つて來られまして、矢張前日の通り文學上の談論をされました。

　此時分の北村氏の居所は銀座數寄屋橋の傍で、秀英舎と道路を挟んだ角の家でした。此家は北村氏の父君快蔵君の家で彼の前に申上げた金明膏を看板に出し、其他賣藥を營業にせられて居りました。尤も表面上は氏の令弟の丸山君の名前にせられて居つたのです。私が氏を訪問しました時は、細君と此家の二階に寓居して居られて、此時始めて氏に細君のあつた事を知りまして、何處から又何時細君を迎へたか尋ねたくはありましたが、細君の面前でそんな事を聞くのも變だと思ひまして止めましたが、後から人に聞きますと、氏が八王子邊に參られて居つた時分に迎へられたので、神

奈川縣の自由黨では大頭株で、縣會議長などを勤められた（其頃八王子邊は神奈川縣です）石坂昌孝といふ人の娘さんであるといふ事が知れました。私が此の氏を訪問した時の感想を申し上げますと、其の時分私が往來致しますものは無論學生間で、妻帶のものは一人もなく、又細君のある者と云へば、保證人や先輩で、チャンと一家を構へた人達のみでしたから、北村氏が細君と共に二階住居をされて居つたのを見た時には一種異樣の感想が浮びました。若夫婦が舅姑と同住して居る有樣を承知して居る私でありましたならば、此の氏の二階住居に就いて批評を下すことが出來ましたらうが、其の頃純粹の書生氣質の私でしたから、今更何とも申し上げやうもありません。唯だ一種異樣の感想が浮んだと申して置きます。

それから私の身にとりましては、事情の爲に三田の大學に在學することが出來なくなつて、地方に赴くことになりまして、ここに又氏との交際は絶えました。氏は此の間に同士と共に『文學界』といふ雜誌を公にせられて居つた樣でしたが、私の方は新聞といふ俗營業で、純文學の方には緣が薄く、再び出京しましても職業が違うために、疎遠になつて居ました。所が或る朝都新聞を見ますと、小説か何かを書く北村門太郎といふ人が芝の山内で縊死を遂げたと云ふ樣な極く冷淡な書振りで、氏の非業な最期を報じてあつたのに大に驚きました。然し其翌日になりますと、何の新聞にも氏の訃を報じて、何れも大に痛惜の意を表し、殊にどの新聞もその非業の最期を報道することを避けて、唯だ病死とのみ致しました。其頃與謝野君はまだ二十前後の青年で、前の二六新報の編輯整理と詞藻欄の主任とを受持つて居られたので、北村氏の最期の模樣は各社の文學記者が電話で申合せて書かぬことにしたのだと、曾てお話がありました。それから後文學上の交際があつた人々の御盡力によりて『透谷集』が出版せられ、彼の鄕里の學生團體の函東會へも寄贈されましたが、同會でも氏の追悼會が營まれまして、茲に始て氏は此の會に現はれましたのです。

能く考へましたならばお話し申すことも猶ありませうが、まあこの邊で今日は御免を蒙ります。前に申上げた通り、北村氏の親戚や何かに就て問ひ質しもしないで、唯だ幼少の自分の交際や青年時代の極めて短い間の交際を述べたばかりです。猶能く取調べたならば、氏は何うして、又如何なる境遇から文學者になつたか、文學といふことを學校などで學習しなかつた氏が、何んな風に自ら修養したか、年齡の割に早く細君を迎えたのは何という譯か、何うして迎えたか、細君のあつたのは氏に何れ丈の影響があつたか、政治運動までやつたといはれた人が何うして地味な文學者となつたか、また女學校の教員の如き温和な職業を取る樣になつたか、さまで貧乏といはれなかつた北村家の悴に生まれた者が、生活に逐はれた樣に同志間に見受けられたのは何故か、縊死という忌はしき最後を遂げる迄に精神病に罹つたのは何が理由であつたか、これ等のことが解るだろうと思います。隨つて氏の作物の研究上にも大に便宜があろうと信じます。（了）

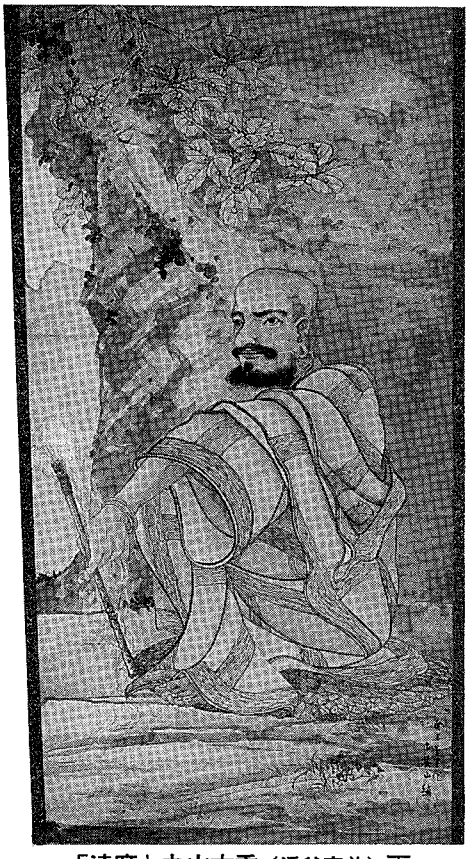
編者付記

坂本易徳は、島崎藤村が、明治三十九年九月発行の『新古文林』で述べた「北村透谷君」に誤りがあるのが動機で、翌月発行の『明星』で、「故北村透谷」を語っている。

だがそういう坂本易徳の話にも間違いがある。

この稿の末尾に、『透谷集』（明治二十七年十月、文学界雜誌社発行の『透谷集』のこと）が函東会に寄贈されこの会で透谷の追悼会が営まれ、ここに始めて透谷がこの会に現われたとある。しかし、透谷は、明治二十四年八月には函東会に加入している。

坂本易徳は、この年の暮、養子先の坂本家から離れ、分家して一家を起している。おそらく、それ以前に養家を継ぐかどうかでトラブルがあり、極東会の会合に出席できず、透谷が函東会に加わったのを知らなかったのであろう。



「達摩」丸山古香（透谷実弟）画。その独創に富んだ作品は、透谷の創造性と二重写しになる。
東泉院蔵

尾崎正さんに 透谷六十年祭の頃の 事情を聞く

聞き手　岡部忠夫

尾崎正氏 近影

透谷碑移転のこと

――まず、透谷碑を移転した理由をお聞きしたいですね。

尾崎　あれはね。大久保神社が社務所を建てるに当たって、なんとか移転してもらいたいと、私の方に相談があった訳ですよ。先代の亮司が中心となって碑を建ったものですから……。先代は、碑を建てるに当たっては、大久保神社の諒解を得て、社地の崖ぷちに立てたんです。……社務所を建てるに、土台石が碑のところまで行ってしまって、碑が蔭にかくれて人がいっても全く見えなくなってしまう、という事なんで。

それでは、どこかに移転しなければならない。それで、市と相談したところ、図書館（現市役所中央連絡所）の前のところに移したのが一番適当じゃないかということになって、市の了解を得てあすこに……。

それで、うちに出入りしている、板橋の植木やの伴野、それから、茶畑の市石嶌に頼んで……。全部人力で、チェーン・ブロックを使って……。運搬は大八車で行ったですね。あそこから移転したときに丁度、十万円かかっているんです、移転費が。それは、市の方から助成金を貰ってぇやったんです。

そのとき、記念するために透谷祭をやったらどうだという話が出ましてね。

北村透谷六十年祭

――すると、透谷六十年祭と透谷記念碑移転の時期が重なったのは、偶然だったのですね。

尾崎　そうなんです。たまたま記念碑移転が透谷六十年祭の時期だったのです。

この書類（前号での引用の故中野敬次郎氏「北村透谷遺品の寄託経過についての覚書」）には、観光協会の会長が小田原市長鈴木十郎とありますが、そのときの観光協会の会長は大島さんなんですよ。もと足柄病院の院長さんです。山角町にあって大正地震で潰れた病院の…。その頃こっちの山本眼科（栄町二―三―三）のそばに居られたんです。その方になってもらって、私が副会長になって……。

それで、会が相当動き出してから、透谷碑を移転することになって……。

観光協会の事業を大々的にやるには、事務局を設けなくちゃいけないということで、市役所の商工課に事務局を置いて、会員の勧誘を始めたのです。この書類（前述覚書）には、事務局を観光課に置いたとありますが、そうではなくて商工課だったんですよ。

……そのうち少し金が出来たんですがね。何かをやろうというので、小島正治さんの土地で、透谷の生家があった跡にね、生誕地の碑を建てようということになって。

……約三坪の土地を無償で提供しましょうというので、小島さんから提供を受けた訳ですよ。

そこに碑を建って、松の木を植えたりね、いろいろ石を置いてね、一応、その記念碑らしい恰好が出来たんです。

そうするとねえ、あそこの土地を売却したいということで……。しばらくしての事です。十年ぐらいしてからでしょうね。記念碑を移転して貰いたいというのです。

それを移転するには、私が小島さんに交渉して土地を貰った訳ですので、私の諒解を得なきゃならないということで……。

私は、すぐ返事をしなかったのですよ。しばらく放って置きました。

ところがねえ、小島さんの方の事情を聞いてみたらば、記念碑がここにあるとねえ、値段がうんと違ってしまうんだと……。何んとか助けて貰いたいと、言うことで、それでは、お宅から寄贈を受けた土地がここにあって、それが、売る段階になると、そんなに障害があるんじゃあ申し訳ないから、お宅で一番差支えのない場所を指定してくれないかと頼んだのが、この辺で如何でしょうかというのが、今建っている場所ですね。だが、如何にしても狭いので、もうちょっとなんとか広く出来ませんか、といったら、何とかこれで勘弁してくれということで、まあそれでは仕方がない、そういうことにしましょうとあすこに記念碑を移転したのです。

それで、移転するときは、市の方から移転費を出して貰っています。

――記念碑の字を英さん(透谷の遺児)が書いていますが……。

尾崎　私が書いてもらいました。英さんは、その前からきています。小田原に来る度に私の所(小伊勢屋)に泊まったり、食事をしたりして帰ったんです。

――話はあと先になりますが、尾崎さんが観光協会を作ったのは、いつ頃になりますか?

尾崎　透谷碑の移転が行われたのは、昭和二十九年ですから、昭和二十六、七年頃ですね。

ところが、会員が、なかなか出来ませんでした。

その理由は初めは分かりませんでしたが、事務局長が遊興のため、集めた会費を使いこんでしまったのです。

しかし、明かるみに出す訳にはいかないので、それで後始末をしなければなりませんで……。

丁度、早川口の平成輔卿の墓所の柵を作ったときの金が少し余ったものですから、それを充てたりしました。市に事務局を置いたのが間違いで、それで会がケムになっちゃったんで……。

だからそれで、私は、懲り懲りしたんで、二度と観光協会を作らないと思ったんだけれど……。

そしたら、今度、沢地勤氏が経済部長のとき、観光協会を作ろうといい始めて…。沢地氏は、観光協会の設立には随分骨を折られたようですよ。一番最初の言いだしっぺ、沢地なんですから?…。沢地は現在の観光協会設立の功労者です。

【註】観光協会については、尾崎さんの話は続くが、この事は、いつか改めて記したい。なお、この小田原観光協会の設立は、昭和五十六年四月一日。会長には、始めて小田原市長が就任することになり、当時市長は中井一郎氏であった。

透谷の遺品について

透谷六十年祭(昭和二十九年五月十五日)のとき、英さんがこちらに持って来た原稿は一括全部頂いたものなんです。

――どの位点数があったものですか。

尾崎　遺稿は、小編のもので、長編のものはなく、バラバラになっていて、なんだかんだで、五十点ぐらいありましたね。「富士山遊の記臆」以外の図書館にあるものは、全部私が持ってきたんですから、あの下北沢の自宅から私が風呂敷に包んで……。

――それは勝本さんのところから?

尾崎　当時、堀越さんは下北沢におったんです。

勝本さん(勝一郎)のところに行ったのは、取り返しがつかないんです。もう故人になっちゃって。

――その遺稿がどうなっているのかと思っているんですよ。透谷全集が完了したならば必ずおかえしますという約束なんですよ。

これは中野課長(社会教育)も聞いているから知っているんです。勝本の処に一緒にいっているからね。「遺稿を」追っかけていったんです。もう出来上がっているだろうからと……。私が中野を連れていったんです。

丁度二年ぐらい過ぎて、また、行ったんです。もう完了しているだろうと。そのときも、まず、英さんのところに寄って。帰り際に英さんに電話してもらって勝本さんの処へ出掛けました。勝本さんも居たんで応接室で遺稿を返してくれるよう話をしたんですが……。

まだ、未完成なんだ、健康の具合が悪いんで、なかなか執筆が進まない、こういう事だったんです。

見たところ、健康上なんでもなかった感じがしたですよ。

居ない時にも二回も行きましたが、そのときには、もう逃げていた訳ですよ。電話をかけて行ったのが悪かったんですね。それで奥さんはドイツ人なんです、日本語が全然判らないですよ。判っているんでしょうけど、判らないふりをしちゃたんでしょう。

――中野さんの覚書には堀越真一さん(英さんの長男)より「富士山遊の記臆」が小田原市に寄託されることによって、多年問題であった透谷遺稿の件が片付いたとありますが。

尾崎　そんなことはないですよ。英さんから六十年祭の席上、持参してきた原稿は全部小田原に寄贈しますと挨拶されたんですから。

私が中野を伴って英さんの処に立ち寄ったときも、英さんに電話して勝本のところに行ったときも、そう言っているんですから……。

それが、また目茶苦茶になったのです。目茶苦茶になったというよりは、勝本に会えないから、諦めちゃったんですねえ。それも熱意が足りないといえばそれまでですが。

透谷の遺骨改葬について

――遺骨を小田原の高長寺に改葬されたのは、堀越さんの意志なんですか。

尾崎　お願いをしました。堀越さんの方へ。

――お願いをしたのは尾崎さん?

尾崎　ええ、お願いをしました。小田原の方にと、北村家先祖代々の墓があるから是非共と……。

向うのお寺だっていい顔をしませんよね。向うにちゃんと墓標が建っていて、それをこっちにもってきてしまうんですからね……。

それで向うの住職、始めは非常にご機嫌が悪かったですけど、こちらは生家で先祖代々のお墓があるんだからと、事情を話して、誤解

のないようにお願いしたいと……。

最後には、向うの住職も非常に気持ちよく、小田原に先祖代々の墓があるんだから、お持ちになってくださいということになって。

遺骨は、土葬でしたから。向う臑が二本と、あとはどこか判りませんが、併せて三つですよ。他は見つからなかったね。あとは土になっていたのでしょう。掘るのは本職で、向うに頼んで……。

――透谷は骨太だったそうですが。

尾崎　えゝ大きゝ骨太だったです。その骨を紙にくるんで高長寺に持って来ました。お寺さんには二日位安置したかな、こちらのお墓の方を整備しませんと入りませんので……。

それで先代の住職といろいろ相談して、どうしたらいいだろうかと話をしたとき、それは結構だ、北村家のお墓があるのだから是非そうしてもらって結構だという話で……。但し門の入口の処に、北村透谷の墓があるという標柱を立てて欲しい、それも永久的なものでね、御影石なんかでやってもらえばいいと、木のあれじゃあねえ、しょっちゅう変えなくてはいけないから、それをして貰いたいと言うので、あゝ、それは早速やりましょうと、俺も中野もすぐ返事をしてしまった訳ですよ。なんかの記念式典を行うときに記念事業としてやりましょう、ということで。

ところが、鈴木市長は、どういう訳か同意してくれませんでした。

……

お骨を埋葬したときにはね、ほんとうに簡単な墓前祭でした。一般の人で参加したのは、いないんじゃないかな。そのくらいこそっとやったんです。その時、英さんは来ませんでした。

小田原に住んだ名士の資料

岸　達志

小田原という所は、城下町の落着きに、気候風光ともに勝れているので、明治以来御用邸もでき、名士の居住する人が多かった。

中で有名なるは、山縣有朋と益田孝であろう。その山縣には蘇峰の書いた伝記があるが、これは主観に傾いているとして、学者の批判が多い本である。益田には、

『自叙益田孝翁伝』

昭和十四年長井実編集発行があり、これは平成元年に中公文庫として出版され、容易に手に入るようになった。文庫版には佐伯彰一の解説がついている。この二人は別格として、その他の名士について、比較的知られていない資料をご紹介したいと思う。

『長興山随筆』田辺勉吉

大正十五年　私家版

田辺は久原鉱業、日立製作所等の重役として活躍したが病を得て、長興山に静養中本書を執筆した。田健次郎、久原房之助等の序文があり、懐顧談、史談等の他、長興山附近の自然についても筆を染めている。

『らくがき』　野崎広太

昭和六年　宝文館

野崎は幻庵と号し、三越の重役、中外商業新報（現在の日本経済新聞）社長となったが、当地ではむしろ茶人として有名である。山縣、益田両氏に親近し、晩年を当地で過ごし当地で歿しただけに知る人も多く、遺品も多い。

この二書は、当地でお持ちの方も多く、時に古本屋に出ることがある。

『喘息の実際的養生法』

村瀬良吉著

昭和十年　治療通信社

市民会館裏の、お濠に面した所に駐車場がある。あの土地に、がっちりした白い西洋館造りの立派な建物があったのを憶えている人があろう。あれが村瀬研究所であった。

村瀬は、明治二十九年東京芝に生れ、幼児から虚弱で喘息に苦しんだ為、その養生法及治療薬を開発するに至った。名づけて「喘息エキス」「ムラセ氏錠」及び吸入治療器アステーラー、等々。講談社の雑誌に広告と発売を依頼し、大正末期から昭和初期にかけ、全国的に知られた。

本書は、三六九頁、小田原で名医の名が高かった菊地泰助博士の序文がついている。内容は、誘因から、養生法が微に入り細にわたって記述され、現在やかましくいわれるアレルギーについて、アレルゲンの名のもとに説明されているのには驚かされる。村瀬は転地療養の為小田原に来たり、ついに当地を中心に活躍された人で戦後迄存命であった。私も一度お会いした事がある。

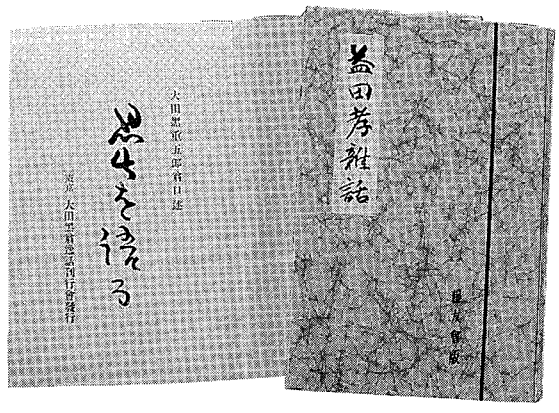
『断食療法の時代』(未見)

『全人類の強健を叫ぶ　断食練成』

小島　八郎

昭和十一年関東断食寮

小八幡海岸で戦前戦後に



る「断食療法の時代」の名前が見えるが、遺憾ながら未見である。

『益田孝雑話』

昭和十三年　糧友会

益田が実業家であり茶人であることは知られているが、熱心な食養家であったことは知らない人が多い。しかし当地にあっては、益田農場、益田牛乳、等の名前を知っている人はまだいる筈である。第一益田が小田原に居をかまえたのも保健上の関心からである。本書は前の三分の一は掃雲台閑話であり、後半は食養雑話として、「研究の動機」「肉食か菜食か」「日本の国力と米の栄養力」等々の記事に満ちている。

『室田義文翁譚』

昭和十三年常陽明治記念会

室田が九十になっても壮健で、小田原から東京へと往来していたことは有名である。水戸の人で実業家であり、晩年は貴族院議員であった。伊藤博文の知遇を得て、ハルピン遭難時は即座にかけよって伊藤を支えたという。その記事によれば、「伊藤は駅二階の食堂からフランス騎兵銃で射たれたので、犯人は安重根ではない」という珍しい話が載っている。本書は、室田の九十二才を期し、その回顧譚を中心として鋭意編集中その永眠にあい、名士の追憶記事をも収め、歿後上梓されたものである。

雨宮敬次郎述

『過去六十年事蹟』

昭和十四年　原安三郎発行

甲州人雨宮は、主として草創期の私鉄事業に大活躍した人で、明治廿七年には豆相人車鉄道社長として、当地と熱海との交通を結んだ功労者でもある。本書によれば雨宮が熱海に療養に行くのに不便なので工を起したという。明治末年熱海で歿し、その記念碑が梅園にある。近年その事蹟が注目され、本書は復刻版がある。

大田黒重五郎口述

『思出を語る』

昭和十一年大田黒翁逸話刊行会

先年なくなった音楽評論家に大田黒元雄という人がいた。『洋楽夜話』というような西洋音楽の啓蒙的な本をたくさん書き、ひろく愛読された。その元雄は小田原中学校卒業生（第五回明治四十三年三月）で、大田黒家は本邸か別邸かを十字二丁目一六五番地（現・南町二丁目七番）にかまえていた。重五郎はその父である。徳川の御家人の家に生まれ、事業家として、益田の頼みで芝浦製作所に入りその興隆を礎いた人である。又箱根塔之沢の温泉でヒントを得て、水力発電に努力したことも書いてある。本書で意外だったのは、学生時代二葉亭四迷と親友だったそうで、「畏友二葉亭四迷を想ふ」という一章がある。

『木全多見追想録』

昭和十六年　私家版

小田原商工補習学校に学んだ片野不空蔵氏（彫刻家）が、木全（キマタ）先生、辻村伊助先生、という偉い先生に習ったという話をよくした。木全は陸軍砲工学校の技術の教官たること二十三年、少将を以て退役、大正二年小田原早川口に来住した。同七年辻村泰兄等有志によって補習学校が創設され、推されて校長となった。昭和十一年逝去後、その追悼文と遺稿とを集めたものが本書である。

教育に熱心、高潔、名利恬淡、といわれ学者肌の人であるが、本書によって明治時代の哲学者大西祝の実兄であることを知り、さこそと思ったことである。追悼文中に土屋秀男の名前があるが、この人はコーエイの前身、足柄印刷所の創業者で面白い逸話を記している。木全は、禁酒禁煙、自然食、エスペラント、等生活改善に熱心で当地の人にも多くの感化を残している。補習学校は小田原商業学校をへて、現在の城東高校となっている。

吉田晴風著

『晴風随筆』

昭和十七年　新世社

『吉田晴風の一生』

附　尺八芸談

昭和三十七年　日本音楽社

吉田晴風は終戦の年に疎開して昭和廿五年六十才の

最後迄小田原に住んだ。大家に似ず市民の盆踊り大会の伴奏等にも気軽にでたので今でも知る人は多い筈である。晴風随筆は本の装釘意匠迄自ら筆をふるい、字も絵も素人ばなれがしていて才人ぶりを偲ばせる。

この本の中には、大正三年京城の街頭で家の中からもれてくる箏の音にききほれて、宮城道雄と出会う劇的なエピソードが語られている。後者の本は藤田俊一がその一生を概述し、記録と芸談を収めたものである。

閑院春仁
『私の自叙伝』
昭和四十一年自伝刊行会

この本には、冒頭に閑院宮家の歴史が書かれ、中に、「小田原ですごした少年時代」という一章がある。六六六頁の大冊で、中に小田原別邸の地図や写真があってよい資料となる。

浅野長武
『美術道すがら』
昭和四十一年　講談社

浅野家は旧広島藩主であるが昭和廿一年来当地に住み、この本には「小田原住まい」という一章があり、「どこかに城下町の匂いが残っている。おっとりした住み心地のよい所である」とほめている。東京国立博物館長として通うのがつらくなり、卅八年に東京へ移られた。私も通勤車中で、同席して談笑される様子をおみかけしたことがある。温厚篤実で学者風な方であった。本書は著者の豊かな教養に溢れた滋味溢れる文章で埋まっている。

『長谷川如是閑　人・時代・思想と著作目録』
昭和六十年　中央大学

『如是閑　八旬荘対談』
昭和四十二年　総合図書

長谷川如是閑は、明治八年の生まれ。晩年の昭和二十九年小田原に来住、板橋古稀庵上に住み、昭和四十四年十一月十一日小田原市立病院にて逝去した。中央大学刊行のものは、本文三六一頁、目録一二七頁に及ぶ大部の伝記である。

『如是閑　八旬荘対談』は、小田原の家、八旬荘で八年にわたって行われた対談を収めてある。小田原来住が八十才の時であったので、八旬荘と名づけ、緒方竹虎が染筆して、玄関にかけてあった。如是閑はジャーナリストから出発したが、晩年は思想家哲人の如くであった。その旧宅の保存が望まれる。

『松永安左エ門翁の憶い出』　上・中・下
昭和四十八年中央電力研究所

各界の名士数十人の追悼集である。当地では隣の秋葉山の山本住職が執筆している。他に松永には著作集全六巻が五月書房から出ている。

以上架蔵の本をメモしてみたが、まだまだもれたものが多いと思う。また木俣修著『白秋研究』(昭和廿一年文化書院)の中に、「小田原時代の作品」という一章があって、当地居住の生活と作品が考察されている。

これは一冊の本ではないが、田辺一雄の出版活動について、ぜひのべておきたいと思う。田辺は昭和四十年小田原市教育委員長在職中昇天した(七十三才)。横浜の生まれで、技師として大正五年小田原電気株式会社に入り登山鉄道の建設に従事したが、結核発病、その体験から、自然療養社を設立した。大正十二年月刊『療養生活』を創刊、四十年間にわたって、全国の療養者の指針として発行しつづけた。そのバックナンバー全巻は、先年私が遠藤哲神父に仲介を頼み、田辺家から小田原市立図書館に寄贈してもらった。今は結核は恐るべき病気ではなくなった為、その功績は忘れられているが、当地を中心として、多年にわたる全国的な活動は不滅なものだと思う。

この他に佐々木良作の『小田原日記』という本が昭和五十五年に日経新聞社から出ている。しかしこの本は、佐々木が小田原の別荘で書いた随筆ではあるが、当地についての記事は見当らない。

この他、当地に住んだ名士は数多いが、今回は私の蔵書のみを紹介した。杜撰な点と、すべて敬称を略したことを御寛恕願いたい。

これらを通じて、小田原という土地が自然に恵まれ、健康保健の上からは、全国随一ともいうべき所であることを、しみじみ有難く思い合わされる。

最後に、他に珍しい資料をお持ちの方は、この際ぜひお見せ頂きたい、とお願いする次第である。

郷土誌目次紹介

◇おだわら―歴史と文化
小田原市役所企画部
市史編纂室発行
〒250　小田原市城山四―二―二
電〇四六五(23)八五一〇

第七号　'94・3　A5二三頁　価一、一〇〇円　〒一、二四〇円

＜論文＞
小田原藩における家中統制―服忌と養子縁組を中心に　土井　浩
柑子と蜜柑　盛本　昌広
豆相人車鉄道の開業をめぐって　川崎　勝
近世遍歴民の世界(2)―小田原藩領下の民間宗教者をめぐって　西海賢二

＜史料紹介＞
飯泉山勝福寺の「観音堂建立施入氏名」帳について　下重　清
三代豊国歌川広重「観音霊験記・坂東順礼第五番飯泉山勝福寺について」　岩崎　宗純

＜調査報告＞
板橋量覚院の中世石造物について　斉藤　彦司

＜市史の広場＞
小田原の関東大地震の記　内田四方蔵

「曽我の傘焼祭」について　川久保和男
身近な地域から学ぶ教育実践　石綿　勉
小田原市立図書館寄託「奥谷関係史料」について　森　徳行
小田原北条氏領国における「検地と内所務」試論　真鍋　淳哉
地域で戦争体験の掘り起しに取り組んで　戦時下の小田原地方を記録する会

◇市史研究　あしがら
南足柄市編集発行
〒250-01 南足柄市関本四四〇
電〇四六五(74)二二一(代)
第六号 '94・3　A5 八三頁　価 二〇〇円　〒 二四〇円
。下田隼人考　本多　秀雄
。文命堤碑を考える　瀬戸　長治

〈研究ノート〉
。内山にあった旧海軍技術研究所　椿田　卓士
。近世南足柄地域の人（その一）　藤平　初江

〈聞き書き〉
。「めけん」で仕事の屋根葺き―保田角蔵さんに聞く　岡部　忠夫

〈市史の小径〉
。金太郎説話を追いかけて　笠間　吉高

◇開成町史研究
開成町文化財保護委員会編集
開成町教育委員会発行
〒258 開成町延沢七七三
電〇四六五(82)五三二(代)
第八号 '94・3　A5 八九頁　価 千円　〒 二四〇円
。足柄の報徳群像2　金井島村　瀬戸五郎左衛門をめぐる人々　高田　稔
。線香製造と水車小屋「開成町を中心にして」　西海　賢二
。神奈川県西部地震への関心と対応I ―嘉永地震の記録を中心に　諸星　光
。開成町の代表的樹木について　井上　義光

◇真　鶴
真鶴町郷土を知る会発行
〒259-02 真鶴町岩六〇六　櫻井方
電〇四六五(68)一五七四
第三十三号　平成六年　年会費二千円　B5 一〇一頁
。前会長故松本敬氏を憶う　櫻井　光夫
。荒井城址について（遺稿）　朝倉　重治
。真鶴ゆかりの禅僧風外　湯本　満
。真鶴海岸に引き揚げられた人間魚雷　櫻井　光夫
。石材運搬船模型が出来るまで　青木　正
。山中城見学　川ノ辺昭治
。和船模型貴船丸を測る　湯本　満
。真鶴二題　さとうよしこ
。ひとつ哀しみ　野中　律子
。平成五年度研究視察報告
。真鶴夜話　中路　脩平
。芥川龍之介『トロッコ』の絵本紹介　櫻井　武

新刊紹介

◇小田原の仏像銘文集
―信仰と造形の歴史―
編集　小田原市仏像調査団
発行　小田原市市史編纂室
A4 七七頁　価 一、七〇〇円
〒三一〇円（『おだわら―歴史と文化』とセットの場合〒三八〇円）

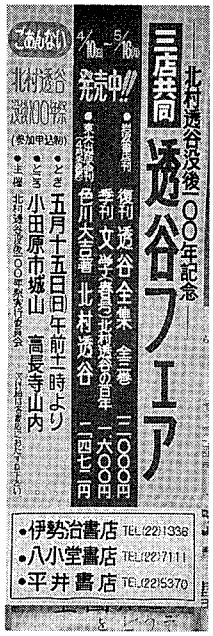
小田原市内の仏像調査は、小田原市史編纂事業の一環として、昭和六十二年四月から、清水真澄成城短大学長を代表とする調査団により実施されてきたが、平成六年度をもってほぼ終了したので、その成果をまとめられたものである。

内容は、解説（清水真澄）、図版、銘文、収録銘文一覧、調査寺院等一覧から成り、貴重な資料といえよう。

◇御家中先祖並親類書4
解読　文の会古文書グループ
校訂・解説　内田哲夫・岩崎宗純・下重　清
編集・発行　小田原市立図書館
〒250 小田原市城内七―一七
電〇四六五(24)一〇五五(代)
A5 四五〇頁　価 三、五〇〇円　〒三八〇円

第二・三巻に引き続き、文久二年（一八六二）に藩に提出された小田原藩士の先祖書一七八家分を収録。江戸時代後半の小田原の動向を知る基礎的資料で、江戸時代最後の仇討として知られる浅田家をはじめ、幕末の様々な内憂外患に翻弄される藩士たちの日常が判る。

なお、本編で全四巻は完結するが、別巻（索引）が刊行される予定。



会員消息

天野宏氏
日本数学史学会「桑原賞」受賞

天野宏氏は、去る五月二十二日(日)十時より、上智大学に於いて開かれた、日本数学史学会総会に於いて、同学会最高の栄誉である、平成五年度の「桑原賞」を受賞された。

「桑原賞」は、故桑原秀夫氏より贈られた基金を以って設定された賞で、選考対象は、①発表された日本数学史および関連領域の研究論文・著書、②日本数学史とその関連領域における研究および普及活動、③学会の名誉を高めた行為の内容に及ぶ。

天野氏は、その労作『神奈川県算額集』の発表（平成五年）の他、最近では、昭和六十二年、小田原市の大稲荷神社と松原神社に奉納されていた算額をそれぞれ復元奉納。また、平成四年十二月には神奈川県和算研究会を結成されている。

三店共同 北村透谷没後一〇〇年記念
透谷フェア
4/10(日)―5/16(日)
発売中!!
●最新書籍 復刊 透谷全集 全巻 二一〇〇〇円
季刊 文学(書目)北村透谷の百年 一六〇〇円
●集英社 色川大吉著 北村透谷 二四七一円
こぶんない 北村透谷没後100年祭 (参加申込制)
●とき 五月十五日(日)午前十時より
●とき 小田原市城山 高長寺山内
●主催 北村透谷没後一〇〇年祭実行委員会
●伊勢治書店 TEL(22)1336
●八小堂書店 TEL(22)7111
●平井書店 TEL(22)5370

小田原叢談(七)

石井富之助

竹がえし

わたしたちの子供のころ小田原にはいろいろな郷土玩具があった。だるま、破魔弓、むかでだこ、笹舟、竹がえしなど、いずれも武井武雄氏や有坂与太郎氏の著書に紹介されているが、わたしたちは実際にこれらを手にして遊んだものであった。

だるま、破魔弓は飯泉のお観音さんのだるま市に売られる縁起物で、関東のだるま市の振り出しの市として、今でもにぎわっていることは別項に書いた。そのほかのものは全部姿を消してしまった。

竹がえしはまことに簡単で、素朴なおもちゃである。武井武雄氏の『日本郷土玩具』には「小田原の竹がえし」という題で、

竹板の裏面に十二か月にちなんだ絵などを現したものを手の甲に並べ、手からずり落とす際の呼吸で、絵ばかり揃えたり、皮付の方を揃えたりする遊びであるが、今はほとんど忘れられたようである。

と書いてある。これが小田原独特のおもちゃであることは、全国的な視野に立って見ないとわからないことで、わたしも郷土玩具の本を読んではじめて知ったことである。しかしこの説明だけではまだどんなものかわからないであろう。

十二か月の絵を画いたものは特別で、わたしたちはみんな自分で竹をけずって作ったものである。

竹は幅二センチ、長さ二十センチばかりに切り、裏の白い部分を小刀でけずって平にし、紙ヤスリで仕上げをする。手作りだから絵なんか画かず、そのままでよいのである。

小さい手ではつかめないから七、八本も使ったであろうか。遊び方は竹全部を手のひらでつかみ、上にほうりあげ、手のひらを返して床の上で甲に受けとめる。つぎに表なり裏なり、全部同じものがでるように床にずり落とす。ここで一枚でも違う面が出れば負け。そのつぎには、また全部を手のひらでつかみ、上にほうって手の甲ではじき、落ちてくるところを全部つかむ。一枚でも落としたら負けなのだが、なかなかそうもいかないから、つかめた数で勝負をきめるのである。

手でつかむ時の音がチャラッチャラッと鳴ってさわやかな感じのする遊びだったが、いつとはなしに消えてしまった。

ところが、それから四十年以上もたった昭和三十年ごろに、これがまたこつ然として現れた。

中学校へ行っていた子供がこの竹がえしをさかんにやっているのである。

「ホホウ。」とわたしは目を見張って「そんな遊びをどこから覚えてきた。」ときくと、

「学校でみんながやっているよ。」といった。

「ふうん、なんという遊びか知っているか。」

おそらく知ってはいまいと思って聞いてみると、やはり首を横に振った。

「これは竹がえしといって小田原独特の遊びなのだ。お父さんも子供のころよくこれで遊んだものだ。」

そういって、竹をつかみチャラッ、チャラッと鳴る響きが、子供のころのものとそっくりなのを確かめながら、何度も何度も打ち返したものであった。

いったいだれが教えたのか、どこからはやりだしたのか。興味を覚えてわたしは各学校を調べて歩いた。周辺地区からしぼっていったら、なんと灯台もと暗しで、わたしの子供がこの三月まで通学していた小学校がもとだということをつきとめた。

そこで小学校へ行って先生にこのことを聞いてみたが、一番のもとはついにわからなかった。

手先の訓練にはもってこいのものだし、第一その音がシャッキリしていて気分のいい遊びである。むかしは女の子にはお手玉だの、あやとりだのという手先の遊びがあった。そういうものがすっかり姿を消してしまったのはまことに惜しい気がする。

そんなことを考えながら、「なかなかいい遊びじゃありませんか。」というと、

「結構ですがね、竹を盗みに行ったりすると困りますからね。」

先生の意見はきわめて消極的であった。そういえばむかしはそこらに竹やぶがいっぱいあった。それが今ではまるっきり見当らない。時の流れで仕方がないかと、何かさびしくなってそのまま帰ってきたが、そのうちにこの竹がえしもいつとはなしに消えてしまった。

最近、また手作り、手先のものが珍重されるようになったが、この竹がえしがふたたび姿を見せることはおそらくないであろう。

(続)

材木屋綺談 その十

たかた・きくせん

初荷の旗に 天下一大桐

それは昭和に入って間もない頃の話である。箱根外輪山東麓の久所の農家の傍らに立つ大きな桐の木を買うことが出来た。普通、桐の樹は直径三十センチ内外のものが多いのだが、ここの桐は直径八十センチもあろうかと見える珍しい大樹なのである。畑の畔に聳え立つその姿は今まで見たこともないほどに巨木である。持主に訊ねると毎年花が咲くと実にならぬうちに全部摘花してきたとのことである。その上畑の畔にあったので肥料が十分にまわったのであろう。

ちょうど正月の初荷とすべく、当日は早朝から現地に上り伐採にかかった。桐は柔らかい木質だから一時間もしないで倒すことが出来た。倒してみるとその太さに今さらのように一同驚いた。やがて枝を伐り払って長いまゝ牛車に乗せ、なお後部に荷車をつなげて梶とりとし、厳重に荷張りして道路まで搬出した。

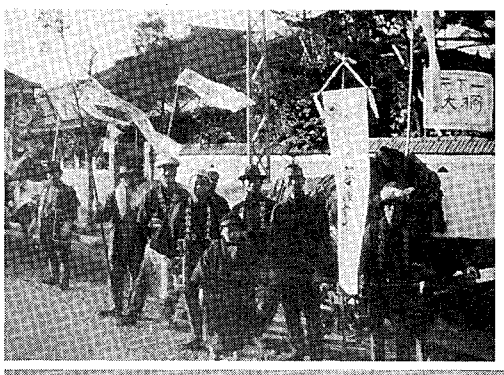
私はきようのこの出荷を初荷とすべく、大きな模造紙に赤の縁どりをとり墨で大きく「天下一大桐」と大書した旗を用意してきたので、この旗を桐丸太に結びつけ、大ぜいの職人と共に意気揚々と小田原へ下った。

珍しい桐の大木を街の人々にも見て貰いたかったのである。

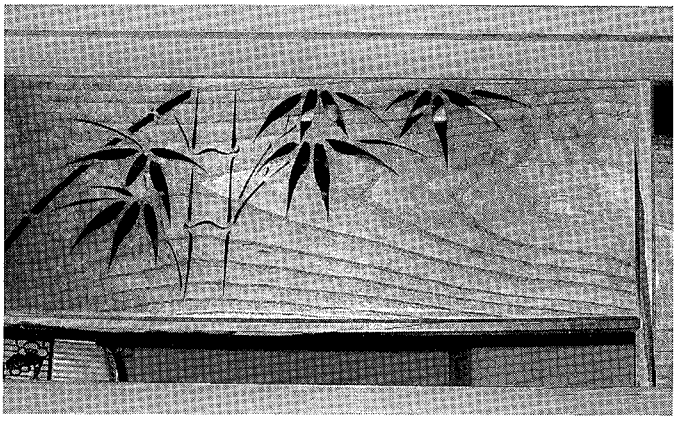
この大桐は店の看板にするために、国道筋の店の前面に横たえた。歩道を通る人々は皆この異様な大木に目をとどめ「これか」とわざわざ訊きに入る人も多かった。ところが余り大きく歩道に少しばかりハミ出していたので、半年経った頃、通行人に危険との噂が耳に入ったので、残念だが横手の材木置場の隅に移して屋根をかけた。

桐材は箪笥用が一番多いのだが、この巨木では値段が引き合わない。琴の材料屋にも見せたが、何しろ太さの割には年輪が浅いので目が粗く難色をつけられ、なかなかに買手がつかなかった。丸太の皮に苔が生えるほどに古くなった頃、漸く買手がつき関西方面の琴屋に嫁入り出来て、天下一の桐ともお別れした。

私はこんな大きな桐にはもう一生お目にかかれまいと、枝の一部で自家用にランマ板と障子の腰板を記念に作り、この二つは今も部屋の中にくすんで生きている。思えば六十年も昔のことである。



天下一大桐の初荷風景



天下一大桐で作った欄間

現代川柳

高井喜雄

年金を霞を食って待つ五年
窓際が定年あとは粗大ゴミ
過疎の町水清くして人住まず
足の裏百一歳のVサイン

遺稿

露国・日露の役俘虜のこと

八十七年ぶりのお礼　前編（七）

文と絵　隠岐威重

先駆者・工藤平助　(2)

ここで工藤平助の『赤蝦夷凡説考』上下二巻に少し触れよう。

北の大陸にウラルを挟んで欧露とシベリアにまたがるこの大国を十八世紀末の鎖国の我が国では、その存在すら知られていなかった。

ただ、時々入る、その地を示す言葉はあったが、その総合が何を示すかは知られていなかったのだ。その点を、この『赤蝦夷凡説考』は明確に示し、定義している。

「赤蝦夷の本国はオロシャなり」と。

この場合の赤蝦夷とは、カムチャツカ・千島に来ているコザックを指している。カムチャツカ千島のコザックの本国はロシヤであると明確に定義し、又、城下はムスコビヤと云う、とロシアの首都はモスクワであることも定めている。「国名をオロシャと云うこといぶかし、オロシャと云う国は万国の内にありや」

ロシアと云う国名はどうも分らぬ、この世界中にあるのだろうか、と疑問を投げる。

「物知りに尋ぬれど知る人なしと伝えり」国内の物知り人種に尋ねたが誰も知らない、だから長崎の知識人、北海道の松前藩士の資料を突き合わせ、また、オランダの書物を参考にすると北の大陸にロシアと云う巨大な国があることが分る。と、誠に科学的に明確な論を張っている。

露国史細部に入り〝赤蝦夷も、これに服従してムスコビヤの役人〟コザックもモスクワ公国に服従、臣事したからモスクワ・露国の役人だ。それがカムチャツカに来ているから、コザックにお前の国は何処かと尋ねれば、「ろしや」と云う事になる。と、二段論法を張る。そして、本書は、ロシア・コザックの言語、文字、地理、歴史に、少しく経済にも触れている、また、「シベリアは元々韃靼・ツングースの故国なり」とも記している。

そのシベリアが乱れて原住民がロシアに救援を求めたから、大軍を送り乱を鎮めた。

法を改め、政治姿勢を正して、上下を融和して、その後撤兵した。よってシベリアの原住民は多いに露国を慕った…と大変露国贔屓に書いて侵略の姿は何処にもない。これは種本が蘭書で、西欧人の考え方、帝国主義の容認、自国の利益、それに伴う植民地の原住民政策であろうか、ここではオランダ人までは責められぬ。

本書の主旨の如く、工藤平助は北方開国論者でもあった。この書は公刊本でなく、幕府の藩の内々の希望で書かれたものであることは念の為。

日露戦争

プチャーチンが露国の第三回目の周航で我が国に来た時には、その一カ月前に米国の捕鯨業者の尻押しで米政府を動かし、米海軍のペリーが江戸の足元に来て、土足で蹴飛ばすようにして、幕府に開国させた時だった。

それから先の幕府の、諸藩の動きを記しても読者は退屈するだけだ。面白い本、正確な資料が世に腐るほどあるから遠慮する。だが、大まかに記せば維新の革命による徳川幕府の崩壊、新政府の成立、その後の西南の役に象徴するように、維新の大立者西郷に続いて大久保の死で革命の主役は逝った。幕末、維新時には小者、二流の人物、伊藤、山県、等がそれ以降の政治を担う。

富国強兵の策をとり、階段を下から駆け上がるように、世界の舞台に昇っていった。

朝鮮問題を挟んでの日清戦争、それに勝ちはしたが、露国を中心に独仏による三国干渉十年間の臥薪嘗胆の末、南下する露国と戦うようになった。小国日本が国を挙げて、それこそ必死で戦った。その努力、その姿が神の哀れみを得たのか辛勝ではあったが露国の南下を食い止める事が出来た。

講和条約がポーツマスで結ばれた。その結果露国からの獲り分が少ない、と東京では民衆が政府の弱腰を罵り焼き討ち騒動にまでなった。

だが、実情は対馬沖の海戦では史上希な完勝とはいえ、陸戦では奉天北方に去る露軍を眺め、それを撃つ砲弾すらなかったのだ。

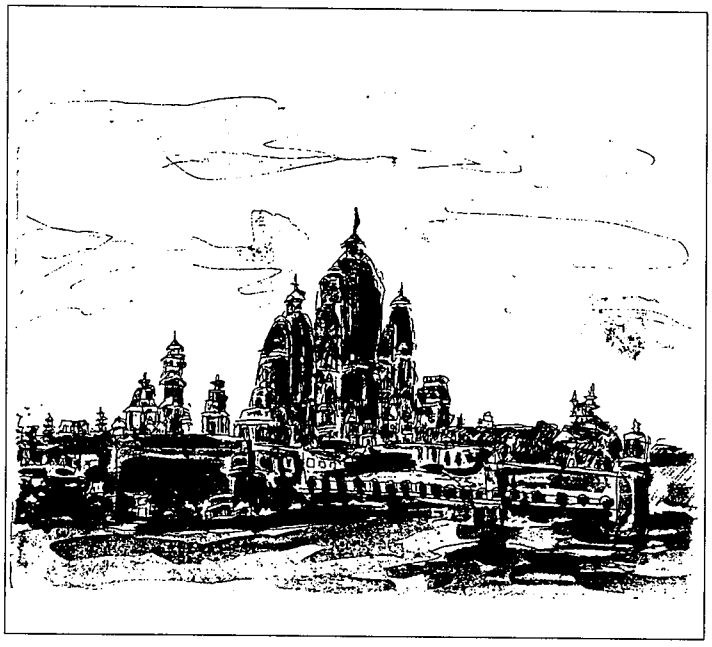
歴史を見ても、露軍の退却は戦法のパターンですらある。退いて、退いて、最後に勝つと云う。

皇帝ニコライ二世も、宮廷も、廷臣も、停戦の気持ちは少ない、確かに海では完敗したが、露国は大陸軍国である。海を失っても、欧露とシベリヤを結ぶ鉄道がある。それで補給をすれば、初戦の一敗位と云う気が強い事は分からないこともない。

だが、日本にとって幸いと云うか、ロマノフ王朝も五百年になり、始期の剛毅もやや失せ、社会の矛盾、歪みを知った最低層の農民も農奴も目醒めてきた。

王朝と云う巨木の中に白蟻が巣くって来た。その不穏の木を齧る響きを底に聞

く皇帝は、では米国を間に立てて話し合ってみるか、駄目なら又やるか、そんな気持ちで講和の場に来た。強気と云っていい。だから、わが国の民衆から見ると結果は不満だった。だが、実は分相応だったとも云える。それより、わが国の民衆から見ると結果は不満だった。だが、実は分相応だったとも云える。それより、この講和、この勝ち戦は結果として恐ろしい物を引き出してしまった。



戦勝の奢り

奢りと云う事だ。国民が皆奢り出したのだ。内容は何も備わっていないくせに、世界の一等国になった。成長したと思い込みだしたのだ。その奢り心が他国を、特に近隣国を軽蔑、黄色人種を蔑視し出した。またその落差の反対に、欧米の白人を逆に侵しがたい存在として心底深く信じ込んでいった。

また少し横道に入ることを御許し願う。

日本人は言葉としての、軽蔑の言葉、罵りの言葉が少ない。

語彙が乏しいと云ったらいいのか。この狭い島国に殆ど同一の人種が犇き、同一の言葉を使って生活している。島を囲む海が他の国の侵すことを拒んでいる。他国の人々と肌をこすり合い、喧嘩をすることもない。罵り合い、血を流すことも殆どない。同一民族の馴れ合いでガヤガヤやっているだけだ。

大陸は違う、国と国が境を接し隙さえあれば犯し、犯される。真剣に、心底からの憎しみを挟んで喧嘩をする。そこで心からの憎しみ罵り言葉が生まれるのだろう。

馬鹿野郎、糞ったれ、コンチクショウ、等々我国の言葉は大したことはない。符丁のような言葉だ。馬鹿ってなんだ?と聞き直されると、その意味が分らない。そんな程度の言葉だ。彼等大陸の民達は違う。「我、汝の母(妻・娘)を犯すであろう」「ツオーニイナイナイ」等々と。事実他民族に国境を侵された時には、彼等の母、妻、娘達は犯されたのであろう。そこに骨の髄からほとばしる恨みを返す罵倒の言葉が生まれる。それも日常、我々が軽く馬鹿な、と云うような時にも使う。彼等も慢性になって軽い気持ちで使って居る時もあるが、考えてみれば大変な言葉だ。日常の用語の中に深い恨みがしみ込んで、彼等の油臭い体臭が蠢いている。

そんな隣国を、隣国人を蔑視しだしたのだ。軽蔑を本体とする思い上がりに乗ってしまったのだ。白人を除いて、東洋では我が民族が一番偉いのだ、と。一番強いのだ、と。高慢が身につき骨がらみになってしまった。巷の人達がそう思うのはまだしも、組織が、まして力を、武器を持つ軍が、そう信じ込んでいってしまった。恐ろしいことだ。

日露戦争が終わったのが、明治三十八年(一九〇五)昭和六年の満州事変まで数えても二十六年、敗戦の昭和二十年迄でも四十年だ。

その間にも、清国末期の北支出兵、露国末期の無意味なシベリヤ出兵、第一次大戦の青島出兵、と小さな戦いがあり、また、軍人が最も嫌う軍縮が内外の圧力でもあった。

現役将校の予備役編入、等々の軍備削減の自己圧力を次の膨張の弾みとし、内部に力を貯え、軍組織として最も慎まねばならない政治の世界へ進出を侵してしまう。統帥権を乱用して、手に負えぬ存在に伸し上がってしまった。

ここで、一歩譲って軍備面だけを見よう。滑稽なことに、世界一流の我が軍の備え、軍備については世界の二流、三流の域を出ないことだ。中国の田舎軍閥との戦いにやっと勝つ程度の備えで満足し、不足な分は精神力とやらで補えば足りると云う慢心で中国との十五年戦争、その騎虎の勢いで世界を相手の太平洋戦争に入り、挙げ句の果てには、国を潰す瀬戸際まで来る大愚行をしてしまった。慢心、軽蔑、蔑視、無知、無能、無反省、不勉強等々と何も良い事なしの組織。その野望、その尻馬に乗って国民が国の滅亡の淵まで一緒に行ったのだ。悪口がとめどもなく続く。あほくさい、止めよう。

(続)

虜囚記 ③

北欧の森に挑む（伐採）

ラーダ（タンボフ州）

文と絵　藤野　明

コーン〳〵鬱蒼たる北欧の森に挑む逞しい音が林を包む朝の空気を破って木々に響き樹間を縫って行く。此所ぞ我々伐採班の五〇〇人が入り込むボルショイボール（大きい森）の密林である。

落ち切った木葉は敷く如く、斧とノコギリによって蚕食された後に、新しい切り株が逐次数を増して行く。巨木の根方に小さくうずくまって二つの魂が約一世紀の樹齢を限りに切り倒さんものと鋭利なノコ目を入れている。

ギー〳〵コン〳〵、風を誘う十一月の寒気がノコを喰い木の髄までも凍て付けている。

「倒すぞー」「倒れるぞー」森に彦する叫びに近くで働く連中も「オーイ〳〵」と山彦の様に返して来る。

梢がじり〳〵動き出す。次の瞬間、バリ〳〵、バリバリと幹と幹、枝と枝との葛藤が熱と火を発せんばかりの摩擦を伴ってズシーン、大地にいやと云う程叩き付ける。

再びシーンとして森の中からコン〳〵ギー〳〵と律動的な森の開墾が始る。

千古斧鉞を知らぬ黒林は、我々の手によって明るい森の窓が明けられてゆく

そして、森に彦して歌う。それ等闘士は、この寵児であり密林の征服者と讃えよう。

しかし、我々の仲間には、巨木に身を砕き、異国の此の土と化し、白々と墓標を立てて行った、幾人かのカメラード（友達）を忘れることが出来ない。

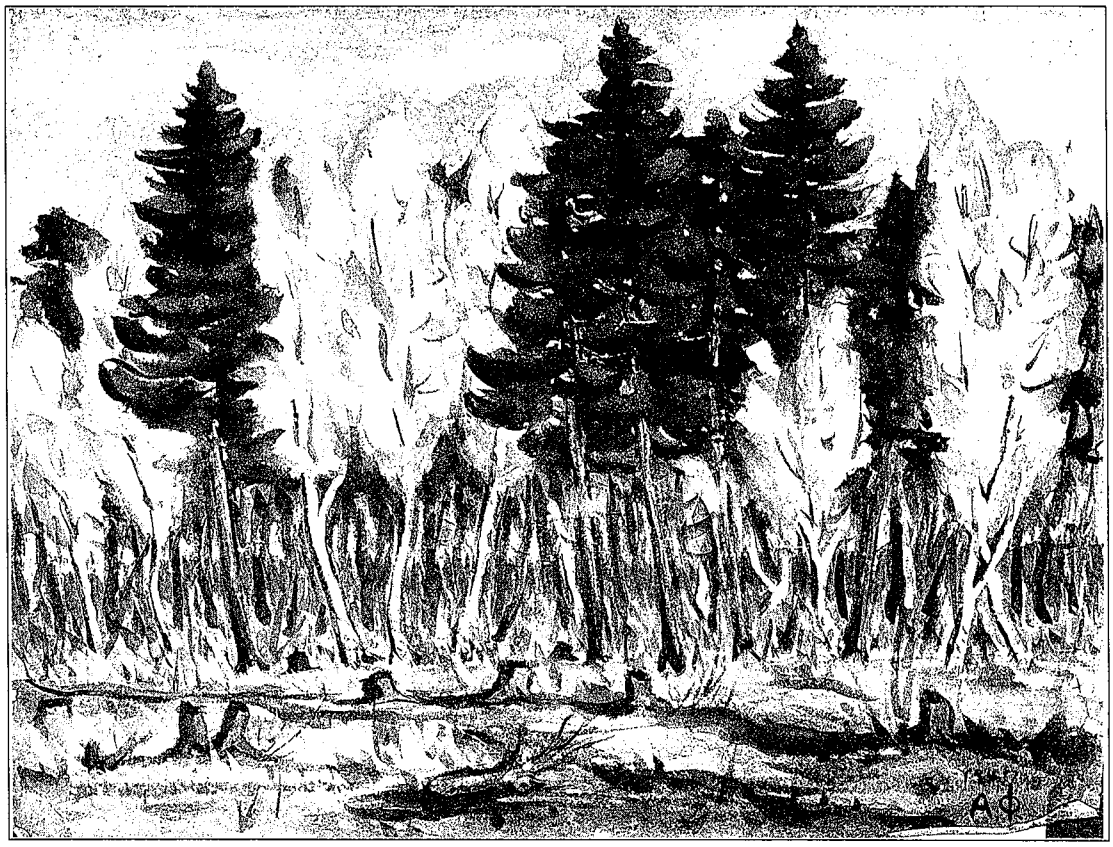
今朝も梢が薄明るく成った頃、闇の土窟から抜出て、黙々として森の中に消えて行った。

故国に帰る日の願いあればこそ、昨日も今日も、次の日も又次の日も闘ってゆく。

地球の何処でどんな事が起こっていようと知る術もなく、そして訪れる人もなき此の作業地は、昇るとも沈むでもなき淡き冬の陽が森の端にかかったまま、何時しか夕暮と共に消えてゆく（日の出約八時半ー日の入三時半…冬）。

暮れ切った大空には渡る雁もなく、ただ風に揺らぐ暗黒の森は魔の如く、その梢は星座を掃く如く、風になびくざわめきは海濤の如く吾々の胸に迫る。

こんな時には、何時も土窟の室には松明とストーヴが、故国を、家を語り、そして母を思う闘士我々の顔を紅々と照らしていた。



平成世情提言

これでよいのか

高井風喜洞

私は今年九十三歳の老骨で、明治三十年代に生まれた生粋の明治っ子である。

天皇を中心に教育勅語を生活の基準として日本人は人生を送ってきた。

この全体主義の国体の在り方が大平洋戦争敗戦の原因であると、終戦後アメリカの指導の許に、自由平等民主主義の平和憲法の国体になった。

日本人はこの自由平等・民主主義の真の意味を勘違いして、我ままで利己主義で礼儀作法・思いやり・義理人情が薄れ、道徳精神が失われ、戦後七十年・日本の世情はこれでよいのか、なげかわしい社会に変ってしまったのである。

第一に国民を代表している国会議員が、国民の望む政治を棚あげにして金権にうつつを抜かしている。

特に閣僚級の代議士が莫大な賄賂を貰っている。しかもこの金を出しているのが実業界一流の有名会社である。

選挙の仕方・献金の在り方・これに対する、罰則等の政治改革も長年の間まとまらず、今度やっと成立したが完全なものではない。

一般社会では詐欺・窃盗・強盗・横領・誘拐・恐喝等の罪悪の中でも、親が子を子が親を殺すに至っては戦前はなかったことである。

身代金目当てか、精神異常か、いたいけな幼児を誘拐し殺傷する行為は許せない。

全国的に暴力団の組織があり、組間の抗争でピストル事件が多く、あらゆる罪悪を犯すので国民は常に生活不安を感じている。

コカイン・シンナー等の薬が多量に密輸入され、日本人の健康をボロボロにしている。

教育面では、国民の基礎育成する小学校・中学校の義務教育で学校暴力や友人間でいじめが蔓延し問題になっている。

子供のしつけの家庭教育も、親子のコミュニケーションが殆どなく、子供としての礼儀作法・思いやり等の道徳的しつけが身についていない。

父は勤めで会社に行く。家を守るべき母親は就職又はパートで終日家をあける。従って子供は所謂「鍵っ子」で、監督するものがいないので、自由が原因で非行に走り、登校拒否者が年々増加する。

家庭の経済状態は、幼稚園・小・中・高校・大学までの教育費が一千万円以上かかる上に、マイホームを持ったために土地及び建築費が莫大に高いので、長期ローンの月々の支払が家計を苦しめている。

それなのに結婚式の費用は年々派手になり、特に披露宴の如きはあたかもショー的である。

普段厄介者としていたわらない老人が死ぬと葬式だけは立派にやる。いづれも庶民の醜い見栄である。

主要道路は、大小多数の車が多過ぎて騒音と渋滞、その上、交通事故が毎日のように発生して年間一万人以上の死者を出している。

その他、山、海で遭難する死者。大事な家屋が、失火放火で年間四、五千戸焼失し、その上多数の焼死者を出している。

その他刑事上での死者を合わせると、尊い生命を失うものが年々増加している。家族に経済的・精神的の打撃を与えること甚大である。

日本は世界一の長寿国だと誇っている。平成五年度百歳以上の老人が四千人を超し、十四歳以下の子供の人口より六十五歳以上の老人の人口が多くなった。

つまり日本は若者の人口が減少している。これは家族計画のもとに、一夫婦の年平均出産率が一・五人が原因である。

ために働き手が不足して外国人の入国が何十万人と増加したために色々の問題が起きている。

一人暮しの老人及び老夫婦だけ家族から離れて暮しているものが七、八十万人に達している。

老人ホームに入所している老人は、国立の老人ホームが少ないため、費用が莫大にかかる、私立老人ホームに入所している。言いかえれば財産家の老人だけが豊かな扶養を受けている訳である。

全国多数の老人は厄介者邪魔者扱いをされている。特に病気又はボケ老人は各家庭で大変不遇の生活をしている訳である。

私はヨーロッパ・アメリカ・カナダ・豪州等世界各国を旅行して廻ったが、老人に対する福祉施設は我が国に比べすべて勝っている。

この不景気の今日政府も国民もこのまま、黙視してよいものか。

政府は政治改革を完全なものにし、福祉施設の充実を計ることが急務ではなかろうか。

私は老齢のため、足が老化して歩行困難のため、外出することなく、明星庵という別宅に一人暮らしをしている関係で、毎日新聞とテレビを友として生活している。

毎日接するのは、明るいほほえましい記事や放送はまれで、いやなことばかりである。

私はこの俗悪な娑婆に生きていることがつらく、一日も早くあの世に召されることを望んでいる。

古文書講座 8

米盗人八兵衛の獄門

内田　清

八兵衛一件の処断

「平成米騒動」は沈静しましたが、米泥棒が連日ニュースになったりしたので、今回は小田原城主稲葉氏の「書抜御日記」から明暦二年（一六五六）の米盗難事件を紹介しましょう。

結論を先にみると、文書③のように六月二日、事件関係者の処罰が決まりました。盗人八兵衛は成敗（斬罪）のうえ首を刑場の道端の獄門台に乗せて三日間さらす。米を買った萬町（浜町）の惣十郎は閉門（戸締め外出禁止）を解除するが、米を被害者に返還する。中宿を勤めた須藤町（銀座通り）八兵衛は財産を没収し小田原領から追放する。と言う内容です。

米盗難事件の経過

事件は一か月前の五月一日の夜おこりました。一部の史料を省略しましたが要旨は次のようです。

藩士松崎源右衛門の屋敷から米二俵（約二三〇kg）が盗まれ、誓願寺町（浜町）の町人市左衛門方へ足跡が付いていて、米も預けて在ったので、犯人は山田作左衛門の中間であった八兵衛だと直ぐ解かりました。

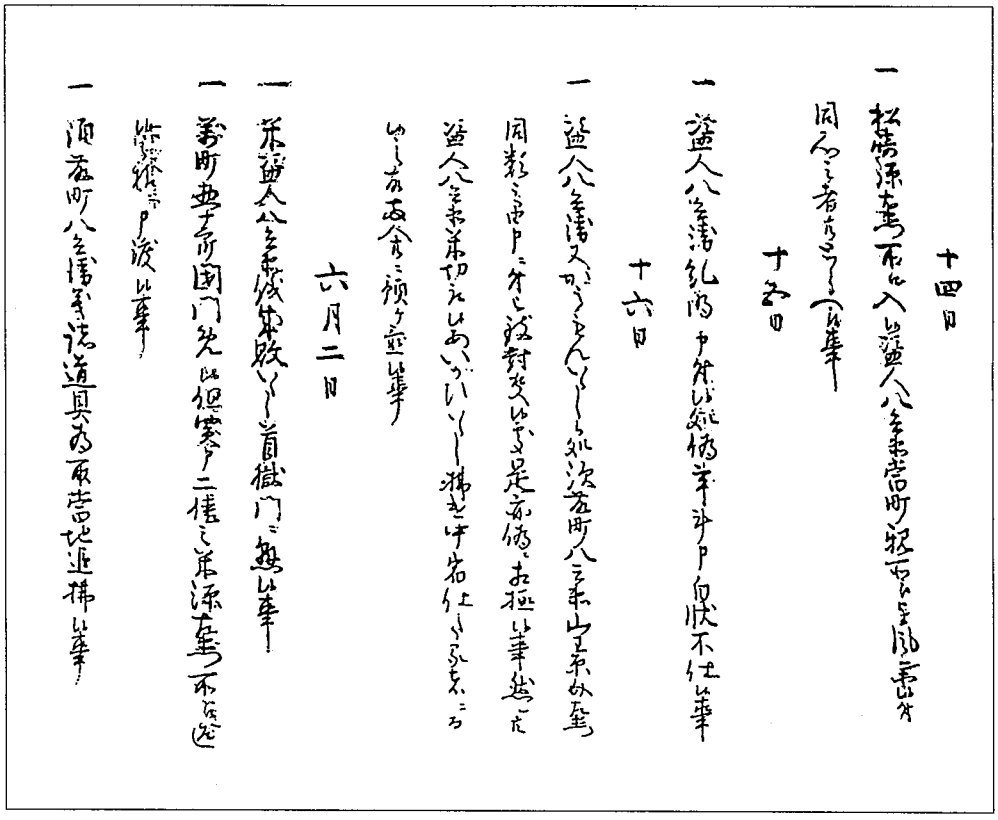
①八兵衛は十四日になって親元へ立ち寄った所を、町奉行所の役人が捕らえました。②しかし彼は、取り調べに嘘を答えて白状しませんでしたので、拷問に懸けられました。③彼が同類だと述べた須藤町の八兵衛や山王原の介左衛門も、対決させてみると幇助者に過ぎなかったが拘留しました。この後半月を経て、前述の処断となりました。

法と処罰の執行

盗人八兵衛は幕府法の「盗み仕るべくと忍び入り候へば死罪」を厳しく適用されました。万治三年（一六六〇）に竹之下（小山町）に在った小田原藩御蔵から米二升（一・五kg）を盗み出した仁蔵は「うつけ者」として放免されています（御殿場市史4）。盗人八兵衛は、偽り発言等で係官の心証を害したのでしょう。

また寛文元年（一六六一）盗みに入って家主に傷を負わせた川柳新田（御殿場市）の金十郎は、斬首の上ため し斬り、縁座制で八歳の倅まで斬首されました（御殿場市史4）。盗人八兵衛には男の子がなかったようです。

さて「平成米騒動」関連で死刑の判決が出ることは無いでしょう。人権思想の発展は隔世の差を見せてくれます。


十四日
一松崎源左衛門所江入候盗人八兵衛、当町親所江与ﾚ風参候付、同心之者共とらえ候事。
十五日
一盗人八兵衛糺明申付候処、偽事計申、白状不仕候事。
十六日
一盗人八兵衛儀、いつわりことばかり申ﾆ付、弥拷問ニ懸ケ候へ共、白状不仕候事。
六月二日
一米盗人八兵衛成敗ﾉ上首獄門ニ懸ケ候事。
一萬町惣十郎儀、閉門免ﾚ候、但米弁ニ俵ﾉ米添差不ﾚ返候ハヽ、惣十郎ニ可ﾚ申付候事。
一須藤町八兵衛儀、法度ﾉ為ﾆ在所追払候事。

注意して欲しい語句

おやのところえ、ふとまいりそうろう　ふとを与風・風与と書く所の他は、よく出る字ですが、一字だけだと間違い易いので、運筆を辿りながら字形を身につけましょう。

ご(か)うもんいたし候　拷問は、肉体的苦痛を与えて自白を強要する取調べ法で、笞打(むちうち)・石抱・海老責・釣(つる)責などが用いられました。

すとうちょうはちべえ　須や兵衛は、字形や運筆による正攻法だと誤読してしまうので、この文書中の他の箇所の用字例を捜したり、土地勘や慣用語を動員して解読します。

よろずちょうそうじゅうろう　惣は運筆で、郎は二字のようにみえるが一字としてとらえます。

③ 十六日

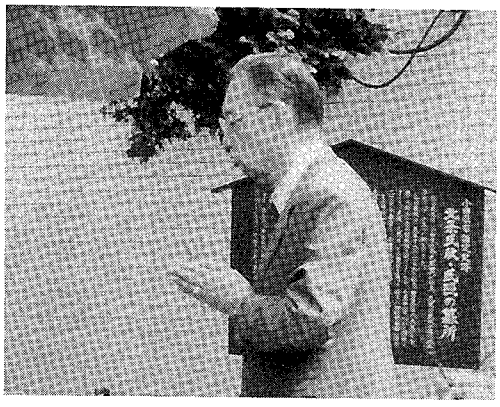
一 盗人八兵衛又かうもん(※拷問)いたし候処、須藤(※)町八兵衛、山王原介左衛門同類之由申ニ付、被レ致ニ対決一候処、是亦偽ニ相極候事。然レ共盗人八兵衛米切取候あいが(相買か)ひいたし、払遣、中宿仕たる者ニ而候之故、両人共ニ預ケ置候事。

④ 六月二日

一 米盗人八兵衛儀成敗いたし、首獄門ニ懸候事。

一 万町(※)惣十郎閉門免候。但買申ニ俵之米源左(右)衛門所江返済候様ニ申渡候事。

一 須藤町八兵衛義、諸道具為レ取、当地追払候事。



込山和勇氏の死を悼む

小田原史談会特別賛助会員の込山和勇氏が療養先の故・込山和勇氏

市内小沢病院で二月十七日未明急逝せられ帰らぬ人となりました。故人は地区自治会長はじめ広い範囲で積極的に活動され大きな功績を残されました。

温厚な人柄と行動力は青年時代に大病をされ長い病院での死と向かいあった闘病生活の中で培われた哲学と夢を、健康を取り戻し社会に復帰した時は「やるんだ」と言う信念から生まれたものであろうと思います。

生前、故人は私に「現在ある自分の命は二度目のもの、神が与えてくれたものだから『人生に借りをつくることは出来ない』と言って居られました。それはお前さんも『人生に借りをつくるなよ』社会から何かを求められたら、自分で出来ると思われることなら引受なさいよ、とのメッセージだったと思っております。

サラリーマン勤めをリタイヤしていた私に、家の中に引っ込んで居ては駄目だと言って地域の二つ三つの勤めを勧められ、現在勤めさせて頂いて居りますのも、また、小田原史談会への入会を勧めて頂いたのも故人のお陰です。

思えば平成二年小田原市は『小田原合戦四百年』と銘打ち数々の記念行事やイベントを実施しましたが、故人は北条遺蹟顕彰会長としていち早く、かっては北条氏の氏寺「伝心庵」の寺域の一角で現在はビルの谷間となって関東大震災による被害から復興したまま放置され荒れていた真葬墓地たる『北条氏政・氏照供養墓所』の整備事業を計画され、行政及び広く各界に積極的に働きかけられ寄付を募り現在見られるような立派な史跡、観光スポットとしても恥じない墓地にと完成されました。そして毎年命日の七月十一日に行なわれてきた墓前祭を「四百年大遠諱(おんき)」として菩提寺の伝心庵、箱根湯本の早雲寺はじめ門中(臨済宗大徳寺派)数カ所の住職による読経が朗々と響くなか市長をはじめ各界、地区の人々多数の香華を手向けての盛大なる墓前祭を行ないました。ここに故人の偉業の一端を記しました。

これからも長く当顕彰会のみならず多方面にわたる活躍が期待されておりましたので本当に痛惜の至りであります。心より故人のご冥福を祈り合掌いたします。

平成六年四月

北条遺蹟顕彰会　世話人

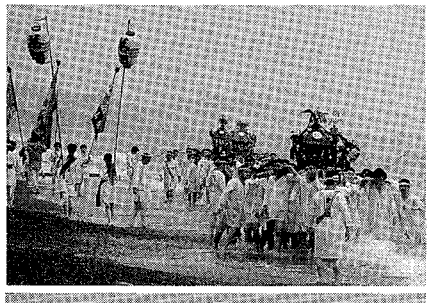
佐々木　康平

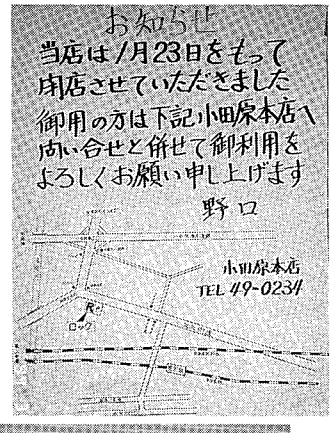
冬の風・春の風

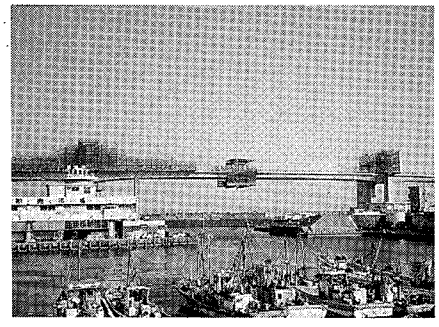
市立小田原文学館（仮称）開館へ

永年の懸案であった文学館は、11月上旬開館の予定で現在鋭意整備中。西海子（さいかち）通りの小田原保健所の西隣の元田中光顕別邸が充てられ、閑雅な文学館にふさわしい雰囲気をもっている。

小田原北條五代祭り







西湘バイパス工事

古墳遍歴（十四）

知られざる皇陵（八）

飯田悟郎

継体天皇陵

第二十五代の武烈天皇が余りにも蛮勇をふるわれたため、その没後一時皇統が途絶え、郡臣協議の結果、応神天皇五世の孫であって当時越前国及び近江北部に勢力を持っていた袁本杼命（オオドノミコト）を迎えて第二十六代の継体天皇とし、仁賢天皇の皇女である手白髪皇女（タシラカノヒメミコ）を妃として皇位を継承させた、ということは皆様も良くご存じのことでしょうし、また一部は前回でも紹介しておきましたが、古代史を読めば読むほどこの継体天皇という方は、まことに数奇な生涯を送られた天皇でございました。

古事記の記載によれば、『（武烈天皇）既に崩りまして（カムアガリマシテ）知らずべき王（ヒツギ）無かりき。故（カレ）、品太天皇（ホムダノスメラミコト、応神天皇）の五世（イツツギ）の孫（ヒコ）、袁本杼命（別名男大迹尊、彦太尊）を近淡海国（チカツオオミノクニ）より上り坐さしめて手白髪命に合わせて天の下を授け奉りき。伊波礼（イワレ）の玉穂の宮（タマホノミヤ）に坐しまして（マシマシテ）天の下治めしき（アメノシタシラシメシキ）。』となっています。

日本書紀の方では、『男大迹天皇（オオドノスメラミコト）は、誉田天皇（ホムダノスメラミコト、応神天皇）の五世の孫、彦主人王（ヒコウシノオオキミ）の子（ミコ）なり。母（イロハ）を振媛（フリヒメ）と曰す（モオス）。振媛は活目天皇（イクメノスメラミコト、垂仁天皇）の七世の孫なり。天皇の父、顔容姝妙しく（カオキラギラシク）して、甚だ嬪色（ウルワシキイロ）ありということを聞きて、近江国の高嶋郡の三尾の別業（ナリドコロ）より使いを遣わして、三国の坂中井に聘して（ムカエテ）納れて（メシイレテ）妃としたまう。遂に天皇を産む。天皇幼年く（ミトシワカク）して、父（カゾ）の王薨（ウセ）ましぬ。

天皇、壮大（オトコザカリ）にして、士を愛で（ヒトヲメデ）賢を礼ひ（ケンヲイヤマイ）たまいて、意豁如に（ミココロユタカニ）まします。』とあります。

このことから、応神天皇から五世の孫という遠い子孫であっても、貴種をいくらかでも血筋の中に伝えていたことと、更に父と母との関係から、近江を根拠地として越前にかけての豊かな耕地を経済的基盤として相当に広い地域を掌握して自分の勢力圏とし、又、恐らくは琵琶湖の湖上権をにぎり、三国港を基盤とする日本海沿岸諸地域との交易をも併せ持ち、此の地域に君臨していた豪族であったらしいことが考えられ、その存在は当然大和政権にも知られていたでしょうし、武烈天皇亡きあと、中央に迎え入れたのも不思議とは申せません。

然し、何があったのか今でもはっきりとわかってはいないのですが、何らかの抵抗にあって、この天皇はすぐに大和に入ることができず、止むなく樟葉宮（現在の大阪府枚方市楠葉）で即位され、後に筒城宮（京都府綴喜郡）に転じ、更に弟国宮（京都府乙訓郡）に遷り、ようやく大和に入られて磐余（イワレ）の玉穂の宮に都を定められたのは二十年後だったそうですが、天皇を待っていたのは平和な生活ではなく、古代日本で最大の内乱でした。

任那（ミマナ）復興のため六万の大軍を朝鮮に派遣した機会を捉えて、筑紫国造（ツクシノクニヤツコ）磐井（イワイ）が反乱を起こしたのです。

故地任那の回復には失敗しましたが、所謂磐井の乱は辛うじて収拾し、治世二十五年にして崩ぜられ、三島藍野陵（ミシマノアイノミササギ）に葬られました。この御陵は大阪府茨木市太田にあり、高槻市と境を接して三島平野に突出する富田台地の西北部最高所に位置し、太田茶臼山古墳とも呼ばれ、周濠を持つ南向きの前方後円墳で、南北二二六米、東西一四六米を測り、墳丘の遺存状態は良好で、三段に築成され、数基の陪冢を伴っています。

然し、近年著しく発達した考古学の厳密な検証の上からは、この古墳は継体天皇陵ではありえない、とのことで、真実の継体天皇陵は東方一・五粁にある今城塚古墳である、とする説が有力となっています。

今城塚古墳は高槻市郡家新町に所在し、太田茶臼山古墳に対峙する形で富田台地の東北部に位置し、墳長一九〇米、後円部径一〇〇米、前方部幅一四〇米、二重の周濠を巡らせた古墳の全長は三六〇米を測り、中世末期に砦として利用されたためかなりの改変を受けてはいますが、中々立派な古墳で、昭和三十三年に史跡に指定されています。

くだくだしい学問的な説明は避けますが、明治初期の皇陵の治定には少々おかしい処があります。

それはどうあれ、この辺りに行かれる事がありましたら、一度詣でられることをお勧めします

（続）

紅蓮洞・坂本易徳 ⑰

岡部忠夫

神奈川県へ合併直前の足柄県下の状況

明治九年（一八七六）四月付『郵便報知新聞』が伝える、二週間後に神奈川県へ合併される足柄県下の状況を紹介する前に、ちょっと、この新聞のことを記しておこう。

創刊は、明治五年（一八七二）六月十日、駅逓頭前島密が太田金右衛門・小西義敬に発刊させたもので、その折、使用漢字を三千二百字に制限し、漢字制限に先鞭をつけている。発行当初は、半紙二つ折木版印刷の冊子で月五回の発行であったが、翌六年六月から洋紙印刷の日刊紙となった。新聞名は、昭和十七年（一九四二）八月、戦時下の新聞統合で、『読売新聞』に吸収され、『読売報知』と「報知」の名は存続したが、昭和二十一年五月『読売新聞』の復題と共にその名は消滅。

ところで、この新聞は当初、郵便という字が冠されるだけあって、全国の郵便組織を使ってニュース材料を集めており、地方記事が明治十年代を通じて多く掲載された。「足柄県下景況」もその一貫の記事である。

足柄県下景況

。県下小学校は追々盛大にて去月の大試験に上等卒業生二名（植田重敬・目良富有）出来せり。併し資金と良教師の乏しきには困却せり

。説教を聴く者なき故かパッタリ音沙汰なし

。洋学校は昨年来小山某教師にて教授を始め生徒は五、六名なりしが当節は閉校したり

。昨年来より漢学大に流行し謙塾では塾生通学生総五、六十人もあるよし

。新聞を見る人極めて少なし夫故か井蛙先生多し

。官員方は他県の人多しより火事盗難の患大に減ぜり

。昨暮巡査の改正ありし

。代言人規則五新布後伸張舎と唱ふる代言会社新建し中山・加藤の両君舎長たるよし。定て従前の悪習を脱除し公明正大の代言をせらるゝなからん

。兼てより陸軍兵出張になるという噂ありしが未だ五派遣にならず是或は朝鮮事件の為めに遅延せしならんとの巷説

。県庁新築の挙ありといふ風聞専らなり

。金銭の不融通には誰も困却する様子

。無くてならぬは病院と足柄新聞なり

。写真師は下手ながらあれ共客はなし

。医者は西洋家も随分澤山あり。然れ共漢方家の力に圧せられて余り流行せず

。洋服を着せる者官員中にも稀なり

。地租改正は調査中にてブツ〳〵苦情を鳴らす者あると聞く

。まだ存在するものは野郎頭に変換性及び蒙藻（俚言密売淫）

。見るもいやなは寒族さんの五閉店

。占めたと喜ぶ者は総体娼妓の不景気

。湯本までの新道出来せしが此頃又畑宿まで新道が出来るという風説あり若し然らば箱根山も人力車にて往来するの便も得ん。殊に七湯中へも人力車道を開くという。然らば浴客に益夥多ならん

。夜芝居はトンチャンチャン相替らず始り居れ共看客なし

。懲役所へ大島氏一六日毎に出張して勧善懲悪の道を懇に説き心切到らざる処なし。実に美政ならずや

。市中処々に常夜灯を建設し厠の設けもあれば歩行甚だ便なり

。去月二十一日より城南の大久寺に十日間県会始まりたり。大議論ある様子

。能く見掛る者は年増の三輪髷に羽織袴の官員さんと豆腐屋なり

（読み易いように行替えした）

神奈川県合併後の小田原の状況

そしてまた、足柄県が神奈川県に合併された五カ月後の小田原の情況を伝えた新聞記事に、明治九年（一八七六）九月二十六日付の『横浜毎日新聞』がある。

この記事は、『小田原市史 史料編 近代Ⅰ』に収録されているが、合併前の記事と比べるため、ここに掲げる。

なお、その前にこの新聞について、触れよう。

創刊は、明治三年（一八七〇）十二月八日。従来の和紙木活字摺りの冊子型に較べ、鉛活字に洋紙両面刷の画期的なもので、また、日本最初の日刊新聞としての栄誉を担った。内容は、外国ニュース、貿易関連記事や外国商館の広告などが載った。時を経るにつれ、新進気鋭の士が入社し、健筆をふるうようになり、中央各紙が啓蒙的な報道から政論新聞と、その性格を変えてゆくにつれて自由民権の論陣を張るようになった。

ついでながらこれ以後の『横浜毎日新聞』の動向を参考迄に記す。

明治十二年（一八七九）十一月十八日、紙名を『東京毎日新聞』と改称、本社を東京に移した。十九年（一八八六）五月一日、『毎日新聞』と改題（現在の『毎日新聞』の前身は、『東京日々新聞』と『大阪毎日新聞』で生い立ちが異なる）して、経営者も交替したが、社運は振わず、昭和十五年（一九四〇）十一月三十日、幕を閉じた。

それでは、明治九年九月二十六日付の『横浜毎日新聞』の記事に移ろう。

相州小田原の近況

。小田原支庁は旧足柄県庁に置かれしが六月下旬より幸町一丁目旧県令の邸宅（と）せられたる官舎へ移転になり諸課雙列（そうれつ）し（ならぶ）一層花美の色あり

。二十一大区の区務所も旧県より引続き庁内に在りしが是も同様県庁内へ移れり

。学区取締は四人在りしが小田原住居の士族計（ばか）りにて平民にはなし夫れ故ではあるまいが学事に付彼是と云々がある由

。区域の経界は西は伊豆駿河北は甲斐当国津久井郡東は第二十区南は大洋なり其直径東西六里余南北十八里余小区の数は十二村数は凡二百ケ余村なり

。旧関所の跡は根府川、箱根、矢倉沢、谷ケ、川村、の五ケ所なり

。平山村（山北町）の瀑布（たき）は高十余丈其の絶景感賞すべし又同村の永安橋は巾二間長二十一間水中杭柱（はしら）なく両岸の風景実に眼目を驚す程の事なり是は一昨年来旧県の鼓舞にて架設なりしと相模以東の者富士参詣の最も近道にして且つ平坦なり

。足柄新聞擴新社は当時副区長の中村舜次郎殿が社長にて成立し月に六号つゝ、発兌し（前号参照）同氏区務の余暇には編輯人となり専ら尽力せられしが昨八年七月新聞條例発令以来編輯人に乏しく同氏も益区務の擔掌（たんしょう）多きに依り同月一と先づ休業の儘なり

。酒田川の激流は人の知る所なれども本月十七日の出水にて所々に水害あり併し幸に人馬家屋等には障碍はなしと

。去る十九日より各小区公立学校の大試験が始り県官と彼の士族学区取締が出張になりました。

（読み易いように行替えした）

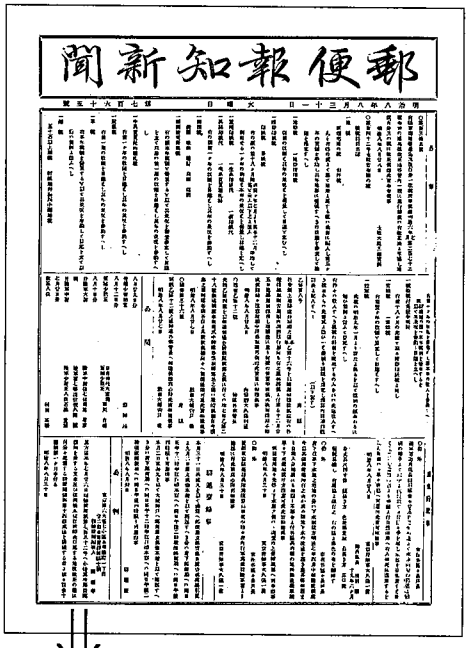
以上、足柄県から神奈川県へと行政区画が変更となる前後の時期の、小田原地方の景況記事を併せてみると、『郵便報知新聞』には、間接的な、あるいは反語的と見られるような表現が多くみられ、短信ながらその時代の一面が浮び上ってくるようである。それも、その時代の出来事を突っこんで伝えるには、「新聞紙条令」や「讒謗律（ざんぼうりつ）」をかい潜る必要があったからだ。

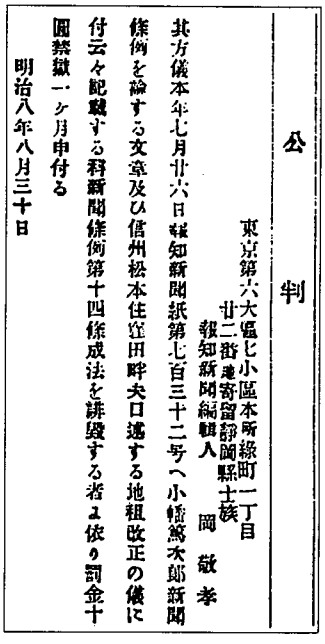
明治八年から十年（一八七五～七七）の間の三年間、新聞人の受難はあいついで、三百人にも達したといわれている。『郵便報知新聞』の編集長岡敬孝は、明治八年、九年と二回筆禍にかかっている。この頁にかかげた『郵便報知新聞』の左下には、彼の公判の結果が堂々と掲載されている。コピーで縮小しているので読みづらいが、「成法誹毀（ひき）」の廉（かど）で禁固三十日、罰金十円の刑を受けている。あたかも、栄誉ある受難のような扱いである。二回目には一年半の禁固刑であった。おそらく新聞人として最高の刑の部類に入るかと思われる。また、福沢諭吉の門下生で、明治七年以降、『郵便報知新聞』に入社の箕浦勝人（みのうらかつんど）、藤田茂吉は、それぞれ禁固六十日、同三十日の刑を受けている。

現在ならば言論抑圧や人権侵害で外国から抗議をされるような事態となろう。封建時代の残滓（ざんし）をそのまま付けて出発した明治国家が近代国家に成長するためには、言論統制の関門を通過しなければならなかったであろうか……。

その背後には、近代国家形成を至上命題として変革路線を遮二無二突走った大久保利通の冷徹で孤独な姿がちらつくが……。

二つの新聞記事から


郵便報知新聞


公判

東京第六大區七小區本所緑町一丁目
廿二番地寄留靜岡縣士族
報知新聞編輯人　岡　敬孝

其方儀本年七月廿六日報知新聞紙第七百三十二号へ小幡篤次郎新聞條例を論ずる文章及び信州松本住窪田畔夫口遽する地租改正の儀に付云々を記載する科新聞條例第十四條成法を誹毀する者ヨ依り罰金十圓禁獄一ケ月申付る

明治八年八月三十日

『郵便報知新聞』と『横浜毎日新聞』両紙とも共通して伝える事項に、『足柄新聞』と「大試験」がある。

『足柄新聞』は、既に廃刊となっていて、このことについては、前号で記したが、その復刊を願って声援を送ってのことであろうか…。

「大試験」の意味については、「学制」(明治五年〈一八七二〉八月公布)に「生徒学等ヲ終ル時ハ大試験アリ」と定め、「小学校ヨリ中学ニ移リ、中学ヨリ大学ニ進ム等」の説明がつけられている。

(続)

丹沢の植物 ⑳

城川四郎(きがわしろう)

ヒトツバテンナンショウ(一葉天南星)は、関東地方の山地にかなり広く分布するが、比較的珍しい種類である。

神奈川県では丹沢山周辺でしか見ることができないようである。恐らく箱根にも分布すると思われるが近年の観察記録はない。

テンナンショウ類のなかには、ユキモチソウのように観賞用に栽培されるものもあるが、一般には、茎にマムシ模様の斑紋があって、マムシなどの蛇を連想させるところから、人にあまり好感を持たれない植物である。全国的には、地方ごとに少しずつ違った種類があり、その分類はなかなか難解で、学者によっても見解が異なり、まだ整理不十分の状態にある。

しかし、ここにご紹介するヒトツバテンナンショウは明瞭な特徴を持っているので、近縁の他の種類と混乱することはない。テンナンショウ類では普通、葉が二枚であるのに、本種では葉が一枚である。

図を見ると、葉が何枚もあるように見えるが、本来一枚の葉が何枚もの小葉に分かれているのであって、図では十一枚の小葉が一つの柄で茎に着いていることがわかって頂けよう。

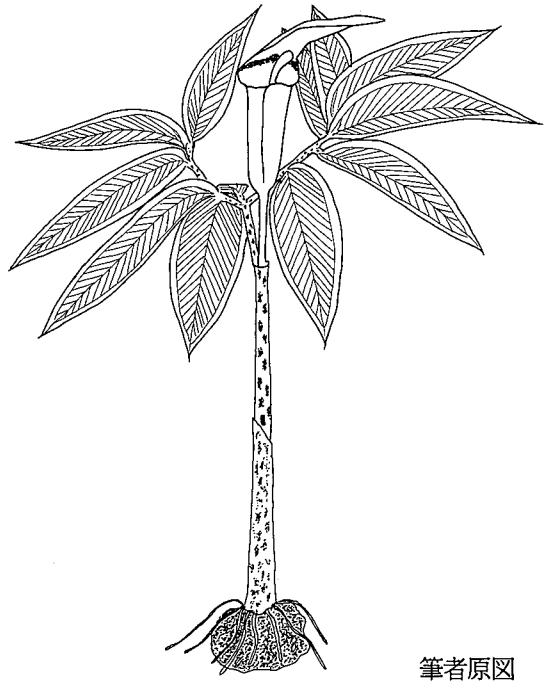
たくさんの小葉に分かれてはいるが、本来一枚の葉なのである。この仲間の花は筒状になっていて、その上を蓋が覆っている。

本種では、その蓋の付け根に山型の黒い模様があり、蓋の先は垂れないで斜め上を向く。筒の中には雌しべや雄しべを着けている軸があり、その軸の先が筒の外に顔を出す。本種ではその軸の先が少しふくれて前に傾く。

本種に限らず、テンナンショウの仲間は雌雄の株が別々である。雄株か雌株か知りたければ、花の筒の中をのぞき見して、筒の中に雄しべがあるか雌しべがあるか確かめればよい。しかし、この仲間の雌雄決定は球根の栄養条件によるらしく、球根が小さいうちは雄で、球根が肥大してくると雌になる。だから小さい個体は雄であり、大きい固体は雌であるから、花の筒の中をのぞき見しなくても、外形を見れば雄か雌かだいたい見当はつくものである。

夏を過ぎる頃には、雄株は枯れて地上から消えてしまうが、雌株は赤い実を頭にのせて秋になってもしっかり立っていることが多い。

ヒトツバテンナンショウ(さといも科)
Arisaema monophyllum Nakai



筆者原図

東泉夏季大学講座

七月二十四日(日)一時半　来聴無料

○和田重正の生涯と思想

和田純子夫人

○中島敦「悟浄歎異」ひとり語り

古屋昭子

東泉院　小田原市久野一五六五

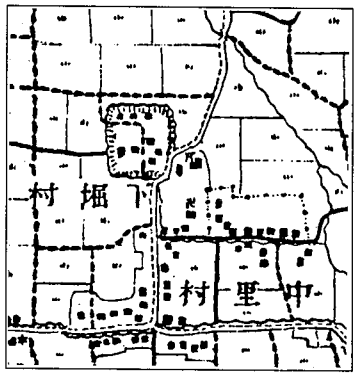
電話〇四六五―三五―三三四一番

昔の名残りを僅かに残す
下堀城址（小田原市下堀）

小田原市下堀に、下堀城址があり、それは、志村某の邸址であろう、という記録が『大日本国誌』（ゆまに書房版）に載っている。

下堀城址

足柄下郡下堀字宮脇ニアリ今宅地トナル東西五拾八間（約一〇五、五m余）南北六拾間（約一〇九、二m余）壘塹（とりでと濠）ノ祉之ヲ繞ル濶大（ひろく大きく）約三四間（六一、四m～七、二m）或ハ九尺（二、七m）許蓋シ本村概ネ城垣ノ地ニシテ是牙城（大将のいる城）ナルベシト云村人志村氏ノ先志村某甲斐武田氏ノ臣ニシテ原重政卜共ニ晴信ノ内命ヲ受ケテ駿河竹下村ニ寓シ（仮住い）後本村ニ移リ住ス村内十七戸中志村氏ヲ稱スル者十五戸アリ此地蓋シ某ノ邸址ナラムト云原重政ハ□□ノ子ナリト云後大住郡下大槻（秦野市）ニ住シ其甥利胤ニ來リ天正中閑地ヲ墾シテ三百年餘石ヲ得タリ子孫世々里正（名主）トナリ其家今存ス



「小田原近傍」第6号（拡大）
明治16年測量、同20年10月出版
参謀本部陸軍部測量局

「志村氏ヲ稱スル者十五戸」のうちには、江戸時代初期に志村に改姓するよう命じられた、という云い伝えのある家もあるようだが、

池貰い国宝は唯とられ

電力の鬼と言われた耳庵松永安左エ門は板橋に資料館を建て、そこに所蔵する逸品を納め、時折り展示会をひらいて小田原の好事家を喜ばせた。耳庵の死後、国宝の野間仁清作壷「吉野山」その他の外、敷地内に建てられていた茶室「黄梅庵」も全部耳庵の生地に持っていかれ、庭園の池と建物のみが残された。小田原市文化行政の貧困を思わせるものとして惜しまれてならない。

秋しぐれ殿様伍長の墓碑あわれ

小田原藩最後の殿様大久保忠良は、明治十年の西南役に参加して戦死した。しかし維新時における小田原藩の抵抗により明治政府は小田原をうとんじた。元藩主大久保忠良も華族としては最低の伍長兵として戦死した。世が世ならばの思いを痛感する。

いま世田ケ谷に在る大久保氏代々の菩提寺教学院に詣ると、広大な墓地に群立する代々藩主の最後尾に、徒らに巨大なる「陸軍伍長大久保忠良」の墓碑が肇に蔽われて哀れをとどめている。

小田原は大河ドラマにみな外れ

NHKの大河ドラマは観光資源として各地で引っ張りだこである。歴史の町小田原もこれにあやかろうと懸命なのだが一向に取り上げられない。「春日局」のときも地元関係はさてこそと大騒ぎしたが、小田原は遂に登場せずじまい。「武田信玄」でも杉良太郎扮する北条氏政がちょっと顔を出すだけで、すっかりあてが外れてしまった。

ともかく、下堀に住む志村姓の家を最近の電話帳で調べると二十八軒もあり、同番地の五軒を除いても二十三軒を数える。いずれにしても志村氏一党の子孫であろう。

ところで、居館跡をめぐる砦と壕は、市下水道部の下堀用悪水路維持修繕事業として、東側と南北側はコンクリートで固められていて、僅かに西側が自然の形をとゞめているだけである。と、いっても一メートル程の狭い水路となっていて、昔の形そのままではない。

コンクリートで固めないで、そのまゝにして残して置いて欲しいというのも、其処に住む人達の生活の利便を考えない、部外者の感傷というものであろう。

（岡部　忠夫）

落穂集

◎前号で透谷没後百年を記念して、「北村透谷特集」を組んだが、紙面の都合で掲載しきれない稿があった関係で、今回も「特集続編」を発行することになった。こんな辛口の意見もある。

透谷、透谷と騒ぐけれど、どれだけの人が読んでいるであろうか？尾崎一雄や川崎長太郎に較べて難しすぎると。確かにそうかもしれない。本号の「富獄の詩神を思う」の中で難しい言葉に意味や読みをつけたが、諸橋漢和や日本国語大辞典に意味が載っていない言葉がある。透谷が言葉を自分で作ったと思われる。その独創性にきらめきを感ずる。それによく味わえば、二十代半ばでよくぞこれだけの深い思想を持ち得たか、ただ感嘆するより他はない。奇才である。小田原の誇るべき人物である。

なお、透谷特集（前号）を透谷百年祭の仕掛人宇佐美ミサ子さんから、当日の来会者に配りたいからと増刷の要請を受けた。幸い印刷所に発注する寸前だったので間に合った。そして増刷分は、印刷所がその袋と共に無償提供してくれた。その好意を紙上を借りて謝意を表したい。

小田原史談会総会

小田原史談会総会は、平成六年四月二十三日（土）十三時より小田原市立郷土文化館において開催。平成五年度事業報告、決算報告平成六年度事業計画及び収支予算が承認された。なお『小田原史談』総括編の第三巻は、本会の積立金と小田原市ふるさと文化基金の助成とにより出版予定計画を立てていたが、諸般の事業を勘案して、積立金のみによる発行に計画を変更、平成七年度以降に刊行することとなった。

ついで役員改選に移り、別項の通り新役員が選出された。

総会に引続いて、小田原文化財保護委員長杉山博久氏による「相模川と酒匂川流域の古墳群」と題した講演が行われた。

〔出席者〕

富田千春、飯田悟郎、小栗良英、高橋佐年、安藤繁美、小林房子、西山鮭太郎、岡部忠夫、吉池清、和田登、石井艶子、向山重忠、湯川玲子、高田喜久三、中村條二、山室定尾、高橋徳、伊与田良太郎、中村俊郎、小西マツ、木曽正雄、本多正八、斎藤精一郎、杉山正善、広山紀世、内田公子、野村信、山口貢、西郷富子、両毛承子、杉山竹二、松本巽、青木友吉、増田任司、高田知予子、石井敏三、和田治助、河本登志、大川務、小田中正二、山口一夫、天野宏、小野意雄、横沢正美、内田清、田中ヒサ江　以上四十六名

（順不同敬称略）

事業報告、決算報告、事業計画、収支予算及び新役員は次の通り。

平成四年度事業報告

◇平成五年四月二十四日(土)
総会於小田原市立図書館
講演会「数と日本文化」
講師国士館大学教授・日本数学史学会会長
下平　和夫氏

なお、下平和夫教授は、本会のため、二、三年後に講演して下さる予定であったが、三月七日急逝されました。享年六十六歳。ご冥福をお祈りします。なお、代表的著作として、桑原賞受賞の『日本人の数学感覚』（昭六二、PHP研究所刊）を遺されています。

◇五月二十八日(金)
曽我傘焼祭（役員出席）

◇五月三十日(日)
史跡巡り　小田原城周辺
講師　山口　貢氏

◇七月十一日(日)
北条氏政・氏照墓前祭
（役員出席）

◇七月二十一日(水)
史跡巡り　県内観音巡り

◇九月十九日(日)
二宮尊徳墓前祭（役員出席）

◇九月二十四日(金)
久野古墳祭（役員出席）

◇十一月一日(月)
史跡めぐり下見房総方面

◇十一月十一日(木)十二日(金)
史跡めぐり　房総方面

◇一月二十二日(土)
初詣　静岡浅間神社

◇二月二十六日(土)
講演会　演題「頼朝の旗上げと土肥実平」
講師　湯河原町文化財保護委員長　高橋徳氏

訃報

山崎与平氏
（小田原市飯田岡二八七）
去年九月七日逝去されました。享年七十四歳

込山和勇氏
（特別賛助会員「昇玉」社長　小田原市栄町二～八～五）
本年二月十七日逝去されました。享年六十八歳

高橋太重氏
（勤務先小田原市浜町二―三―三　七枚橋米販売店・住所小田原市矢作二四一―三）
本年三月一日逝去されました。享年七十一歳

高橋清蔵氏
（小田原市南町一―三―二）
本年三月十五日逝去されました。享年八十七歳

奥津金作氏
（小田原市早川一三九）
本年四月三日逝去されました。享年八十二歳
ご冥福をお祈りします

平成6年度収支予算書（一般会計）

収入の部

区　分	予算額(円)
前年度繰越金	248,360
会　費	1,200,000
市補助金	24,000
雑　収　入	640
合　計	1,473,000

支出の部

款	項　目	予算額(円)
庶　務		275,000
	総　会　費	30,000
	会　議　費	70,000
	会員連絡費	105,000
	交　際　費	60,000
	事務用品費	10,000
会　費		108,000
	振込手数料	5,000
	名簿印刷費	63,000
	名宛ラベル	40,000
	事務用品費	0
企画事業		170,000
	調　査　費	70,000
	講演会費	80,000
	座談会費	20,000
会　報		700,000
	会報印刷費	550,000
	会報発送費	150,000
予備費		70,000
	予　備　費	70,000
積立金		150,000
	積　立　金	150,000
合　計		1,473,000

財産
積立金　607,764円
（内訳）定期預金
さがみ信用金庫　307,764円(平成5.4.8預金)
〃　〃　300,000円(平成5.8.2預金)
合　計　607,764円

監査　高橋一夫　山口佐年

平成5年度　収支決算書（一般会計）

収入の部

項　目	決算額(円)	付　記
前年度繰越	204,885	
会　費	1,197,000	399名
市補助金	24,000	
雑　収　入	682	預金利子
合　計	1,426,567	

支出の部

款	項　目	決算額(円)	付　記
庶　務		240,718	
	総　会　費	23,790	
	会　議　費	62,951	
	会員連絡費	96,113	
	交　際　費	57,000	
	事務用品費	864	
会　費		74,190	
	振込手数料	3,590	
	名簿印刷費	50,000	
	名宛ラベル	20,600	
	事務用品費	0	
企画事業		78,236	
	調　査　費	20,000	
	講演会費	50,000	
	座談会費	8,236	
会　報		600,000	
	会報印刷費	500,000	
	会報発送費	100,000	
予備費		0	
	予　備　費	0	
積立金		185,063	
	積　立　金	185,063	
合　計		1,178,207	

差引残高（次年度へ繰越し）
1,426,567円－1,178,207＝248.360円
（総収入）（総支出）（差引残高）

平成5年度　編集委員会　予算書

区　分	収入額(円)	支出額(円)
前年度より繰越	5,627	
本会計より繰入	700,000	
特別賛助会費	770,000	
雑　収　入	3,373	
会報印刷費		1,236,000
会報発送費		140,000
編　集　費		70,000
取　材　費		20,000
事　務　費		13,000
合　計	1,479.000	1,479,000

平成5年度　史跡巡り　収支決算書

月　日	探訪先	人員	収入額(円)	支出額(円)	差引残高
5・31	小田原城周辺	22		16,500	△16,500
7・21	県下観音・国分寺	54	405,000	377,040	27,960
11・11-12	千葉銚子方面	25	*760,000	756,884	3,116
1・22	初詣・静岡方面	46	276,000	272,430	3,570
3・31	（預金利子）		181		181
合　計			1,441,181	1,422,854	18,327

（＊寄付金 10,000円を含む）
296,610円　＋　18,327円　＝　314,937円
（前年度繰越金）（本年度剰余金）（次年度繰越金）

役員会
4/19　7/3　10/29　1/17　3/27

編集委員会
No.153　六月発行　二八頁
No.154　十月発行　二八頁
No.155　一月発行　二六頁
No.156　三月発行　三〇頁

◇機関誌編集・発送

平成六年度事業計画

◇総会・講演会
前記の通り
◇史跡巡り
市内・日帰り・一泊
◇講演会　二回（含総会時）
◇機関誌『小田原史談』
年四回発行
◇会員名簿発行
◇役員会　必要に応じ随時開催
各一回、初詣

役員（新）

会　長　富田千春
常任理事　山口一夫
〃（会計）向山重忠
理　事　河合浩太郎
監　事　杉山竹二
顧　問　高田喜久三

なお、他の役員は、一部を除いて留任（平成五年度会員名簿をご参照下さい）。

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
小田原銀座 アオキ画廊
熱海 アオキクリニック
足柄香粧株式会社
飛鳥画廊
紳士服の アメリカヤ
㈱ アルファ
画材 ガクブチ いのうえ
伊勢治書店
伊豆箱根トラベル 小田原営業所
かまぼこ
南足柄関本 おぎの整形外科・歯科
税理士 公認会計士 小澤重治事務所
株式会社 小田原魚市場
小田原ガス
小田原市農業協同組合
小田原報徳自動車
株式会社 オートセンター・スギヤマ
㊕小田原中央青果 株式会社
オリオン座
かまぼこ 籠清
令掌苑
鐘紡株式会社小田原工場
カネボウ化粧品鴨宮工場
神尾食品工業 株式会社
木地挽 日下部産業 株式会社
かみやま小児科クリニック
興電社
小伊勢屋
㈲ 小松石材店
さがみ信用金庫
趣味のごふく さくらい
宝飾専門店 JEWELRY Shimano

正栄堂
中華料理 昇玉
杉山水道工業 株式会社
鈴廣かまぼこ
石寿堂スポーツ
大営不動産
割烹 おるは
そびそ 二宮
茶半家具株式会社
ちんぎう本店
土谷建設株式会社
角田ガクブチ店
東京電力㈱小田原営業所
株式会社 東華軒
トーホー建物 株式会社
和菓子 菜の花
八小堂書店
ハナマサ
平井書店
富士写真フイルム株式会社小田原工場
株式会社 報徳
栄町 松坂屋
学生専科 ㊄ マルク
食器の店 マルサンストアー
みつゆき設計
諸星運輸グループ
株式会社 美濃屋吉兵衛商店
みみづく幼稚園
ヤオマサ株式会社
山口菓子舗
株式会社 ユアサコーポレーション 小田原製作所
防災器具 優光社

＜特別賛助会員＞
平成5年度 編集委員会 収支決算書

区分	収入額(円)	支出額(円)
前年度より繰越	4,415	
本会計より繰入	600,000	
特別賛助会費	770,000	
雑収入	3,671	
会報印刷費		1,153,600
会報発送費		129,337
編集費		59,926
取材費		18,638
事務費		10,958
次年度繰越金		5,627
合計	1,378,086	1,378,086

収入のうち特別賛助会費（一口一万円）七十七万円は六十三法人の協賛によるもので、内訳は次の通り。

〔三口〕鐘紡㈱小田原工場、富士写真フイルム㈱小田原工場　以上　二法人

〔二口〕足柄香粧㈱、㈱小田原魚市場、小田原瓦斯㈱、小田原市農業協同組合、小田原中央青果㈱、カネボウ化粧品鴨宮工場、さがみ信用金庫、みみづく幼稚園、ヤオマサ㈱、㈱ユアサコーポレーション小田原製作所　以上　十法人

〔一口〕　以上　五十一法人　六十三法人

雑収入は預金利子。

支出のうち、会報印刷費は、第一五三号～一五六号（計一一二頁）の四回分です。会報発送費は、会員の外に学校（県西二市八町の小・中校及び高校）、公立図書館・大学図書館ほか各文化機関や行政機関への郵送料（近くは直接配送）及び封筒代等。編集費は、お礼、写真複写、寄稿者連絡郵便料、編集打合わせ費用。取材費は、フィルム、DPE、コピー代等。事務費は、文房具代です。

お陰様をもちまして、充実した内容の編集が出来、非常に好評をいただいております。

『小田原史談』は、小田原の文化の一つの顔であるという意気込みで、編集委員一同努力をしておりますので、今後ともよろしくご支援、ご鞭撻くださるようお願い申しあげます。

小田原史談（年四回発行）
禁無断転載
振替　年会費　普通会員三千円
〇〇二〇-三-六四三三六
小田原史談会会員部